福島県文化財調査報告書(第8集)

—天然記念物入水の鍾乳洞調査—

—福島県埋蔵文化財調査報告書—

1960

福 島 県 教 育 委 員 会

序

文化財の顕揚と活用をはかり，県民に広く知らしめるため，毎年刊行している文化財調査報告書の昭和34年度版第8集は，天然記念物入水の鐘乳洞と，埋蔵文化財調査報告を併せて集録することにした。

入水の鐘乳洞はご承知のとおり，田村郡大滝根山にある鐘乳洞で，昭和2年発見されて以来学界・県民に知られているものであるが，近時新しい第2洞が発見された。これについては文化財専門委員三本杉巳代次（福大教授理学博士）に調査を依頼していたが，今回その結果がまとまったので，先人未踏の新資料として本編の主論文とするものである。

次の埋蔵文化財報告書は，主として当事務局職員梅宮茂が中心となり発掘調査を行なった遺跡のうち，白山住居跡（縄文式）上野尻遺跡（弥生式）金冠塚古墳，横山古墳群　御代田古墳（古墳時代）及び郡山市麓山窯跡（奈良・平安時代）の6編を集録したもので，土中に秘む埋蔵文化財の価値を明らかにして，本県の古代史に新しい一頁を加えたものである。

当調査報告書は，予算措置や編集の上からみて十分なものとはいいないかもしれないが，わが国の学術，文化の発展にその幾分の一でも寄与できれば，本書を企画したものとして大きな喜びとするものである。

昭和35年3月

福島県教育委員会教育長　佐　藤　　光

例　　言

1．この福島県文化財調査報告書は，前後２編にわけて編集した。

2．前編は福島大学教授三本杉巳代次理学博士の報告にかかる天然記念物入水鐘乳洞の報告書である。

3．後編は埋蔵文化財調査報告書として，次のものを収録したるのである。

飯野白山住居跡	（梅宮茂）		
会津上野尻遺跡	（鈴木啓）	（梅宮茂）	
勿来市金冠塚古墳	（波田克俊）	（梅宮茂）	
平市横山古墳群	（渡辺一雄）		
御代田古墳	（佐藤雄寿）		
郡山市籠山窯跡	（梅宮茂）		

4．当報告書刊行に際して執筆された各位および写真製図を担当された方々にも厚くお礼の言葉を申しのべる。

目　　次

— 前　　編 —

天然記念物入水鍾乳洞調査報告書
—福島県岩代国入水石灰洞について—……三本杉　巳代次… 1

— 後　　編 —

福島県埋蔵文化財調査報告

○郡山市麓山窯跡……梅　宮　　茂… 9

○飯野白山住居跡……梅　宮　　茂…17

○平市横山古墳群……渡　辺　一　雄…21

○勿来金冠塚古墳……成　田　克　俊…27

○御代田古墳……佐　藤　雄　寿…32

○会津上野尻遺跡……鈴　木　　啓…33

福島県文化財調査報告書第8集

天然記念物入水鍾乳洞

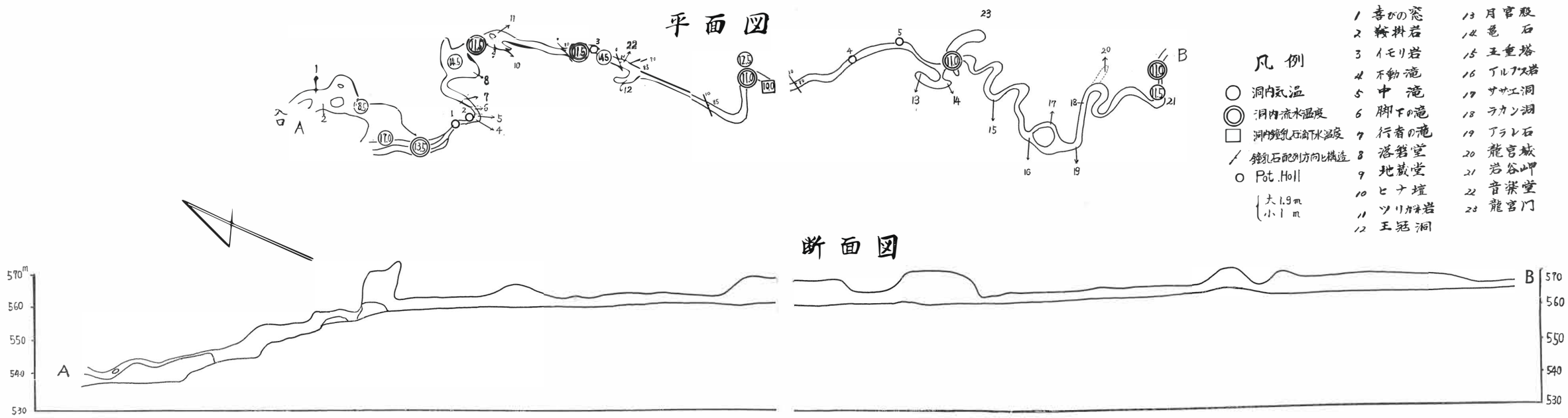
三本杉　巳代次

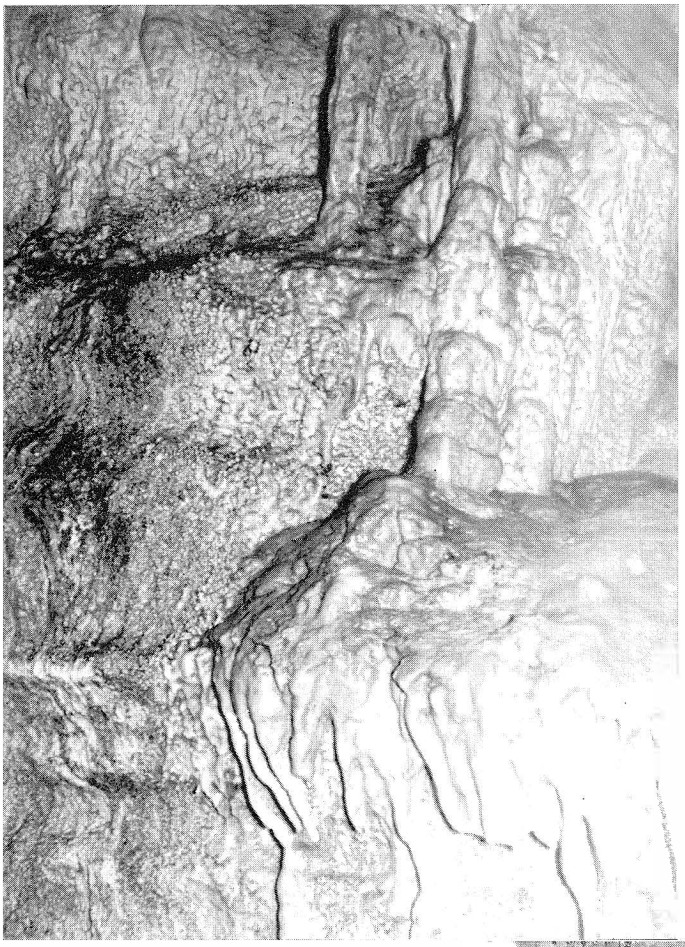
1960

福島県教育委員会

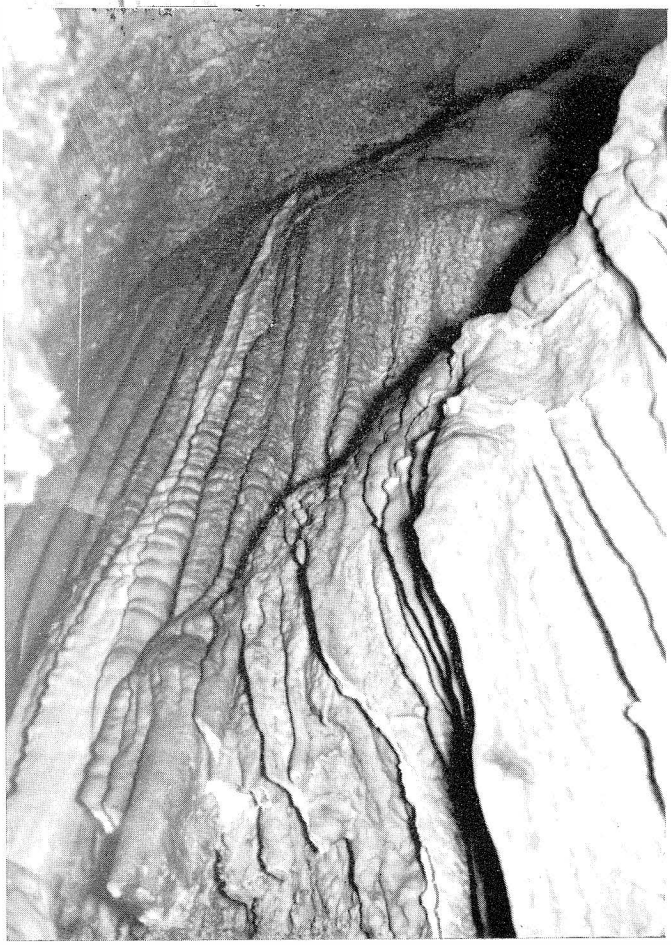
カルスト地形　石灰岩は風化作用のために石灰岩の一部が突出し，また一部には吸込穴等が生じ，特殊なカルト地形を形成する。

瀧根町菅谷地内入水鍾乳洞実測図

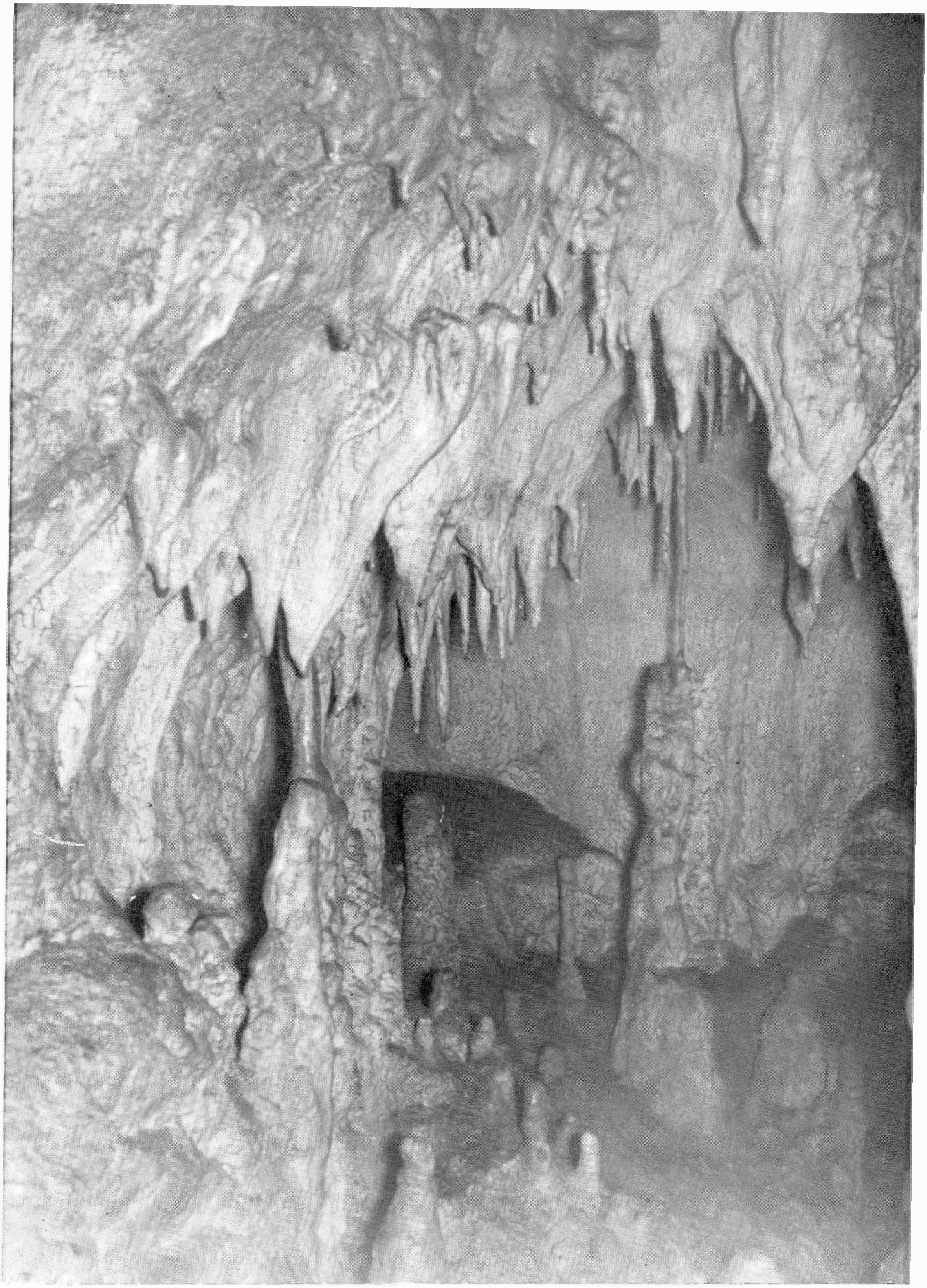




石灰岩の裂罅に沿うて、石柱状に再沈澱が生じている。

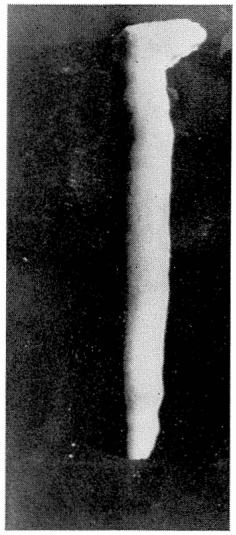


石灰岩の岩石の構造の差によって、侵蝕され、又その上に再沈積して、櫛状の鍾乳石が形成される。

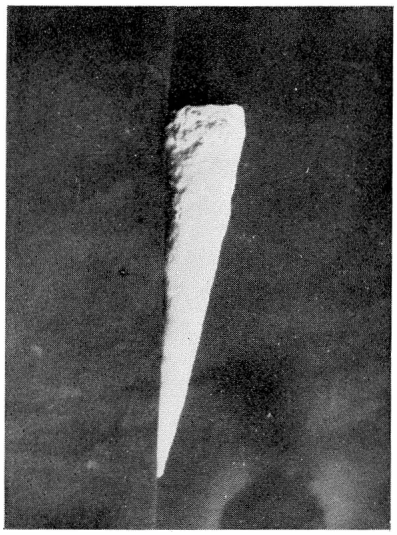


鍾　乳　石，石　筍　と　石　柱

$CaCO_3$を含む水溶液は，初めに鍾乳石が生じ，その直下に石筍が生れ，それらが相接して石柱が形成される。



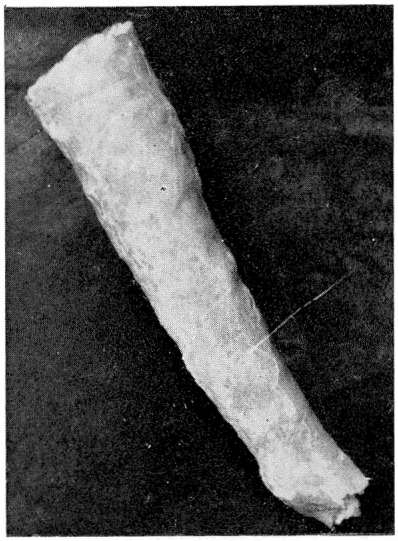
単結晶の鍾乳石



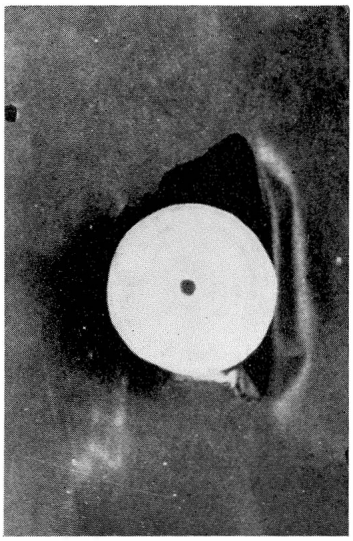
鍾　乳　石

鍾　乳　石

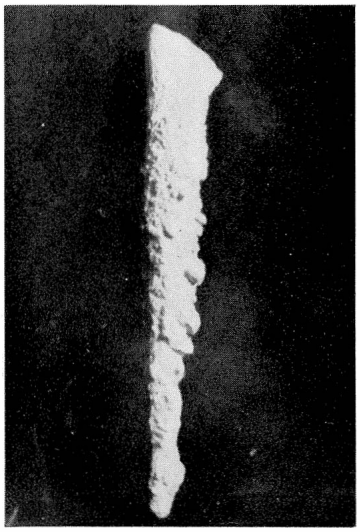
鍾　乳　石



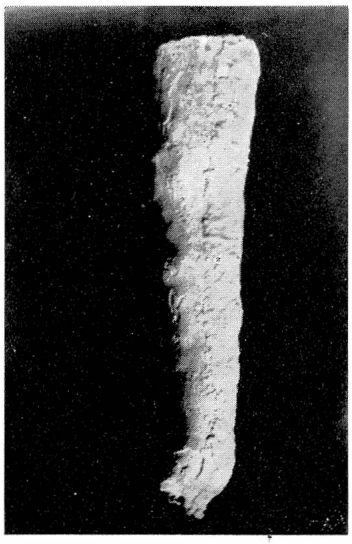
鍾　乳　石



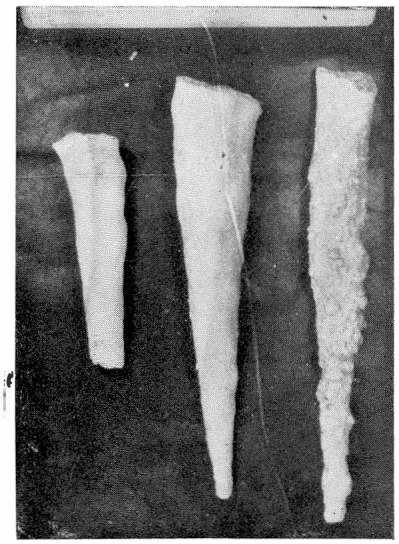
鍾乳石の断面



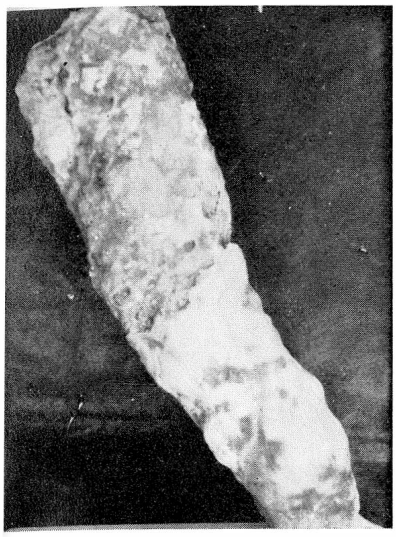
石　　筍



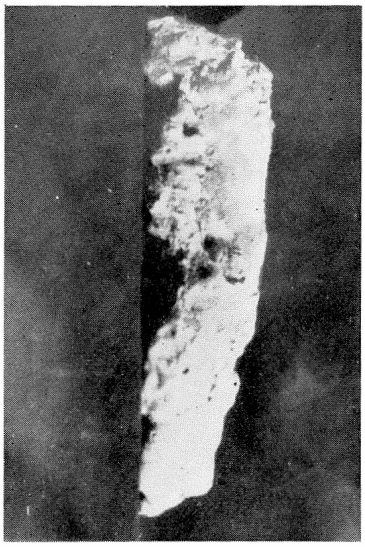
先端が曲った鍾乳石



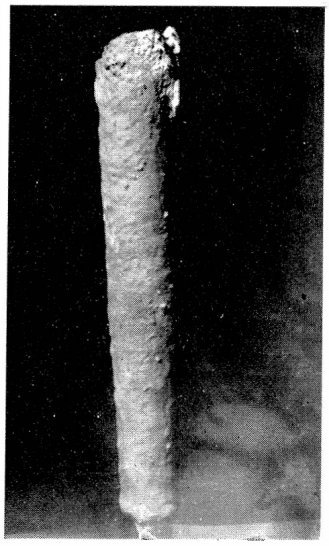
鍾　乳　石



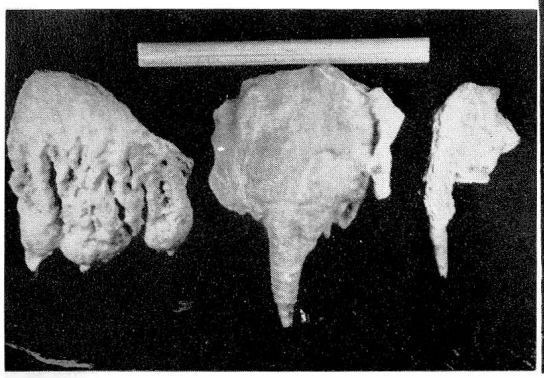
鍾　乳　石



鍾乳石の変種



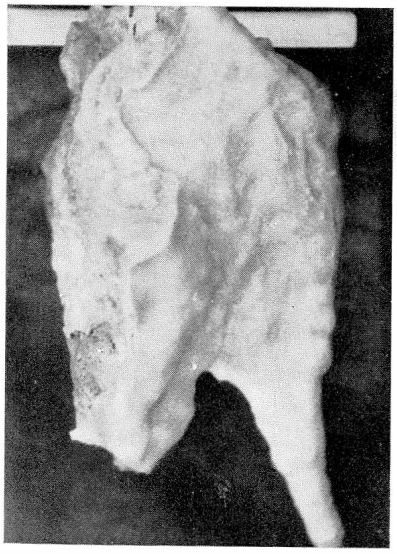
鍾　乳　石



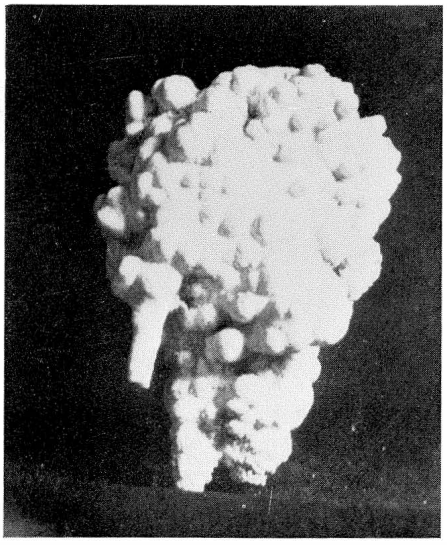
特殊な鍾乳石

鍾　乳　石

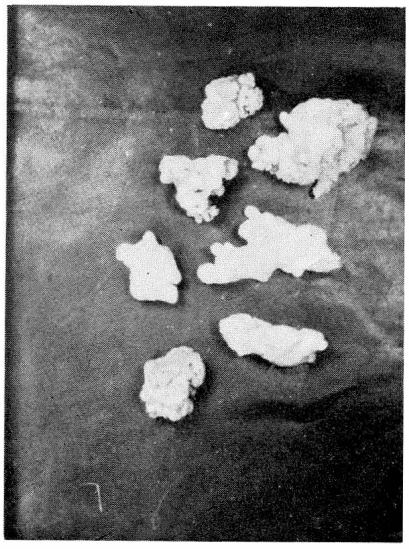
鍾　乳　石



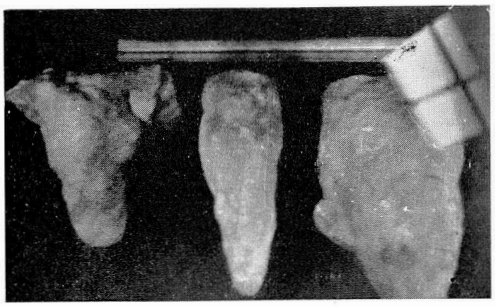
鍾乳石の変種



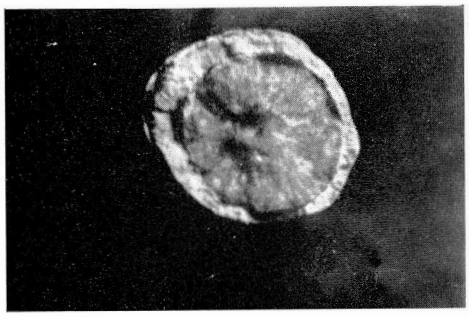
鍾乳石の変種



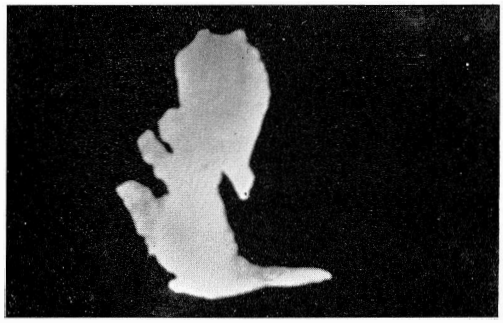
鍾乳石の変種



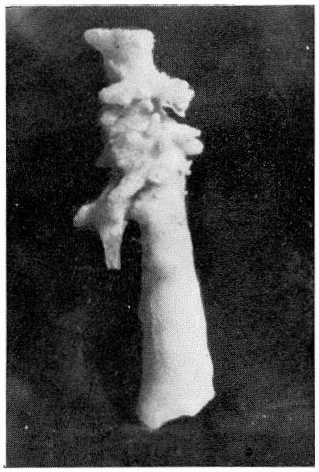
石筍



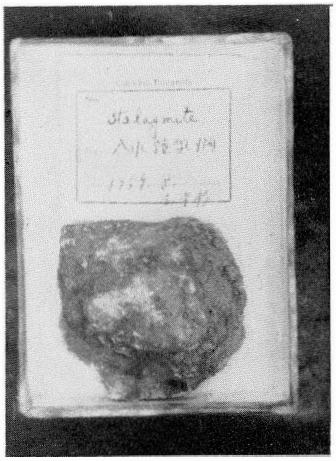
鍾乳石の断面
（同心円状の配列に注意）



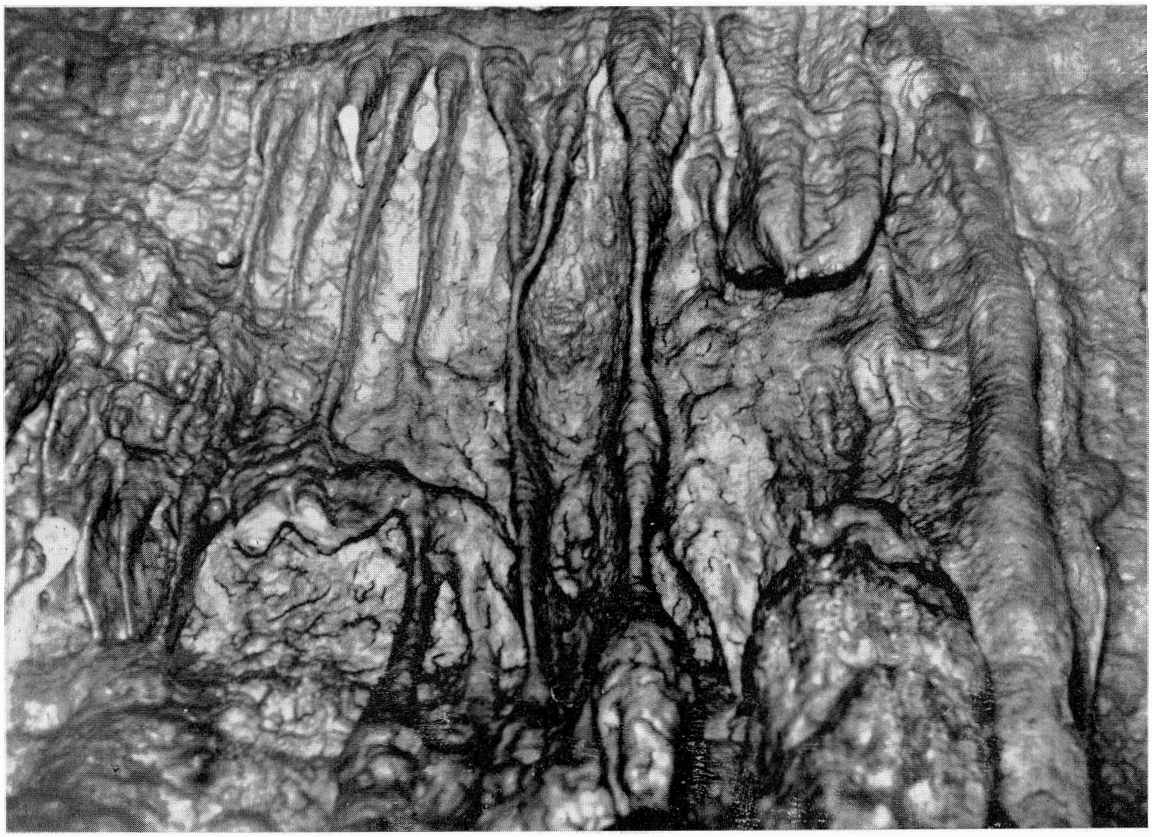
石筍



石柱



石筍の初期のもの



石灰岩の裂罅の壁に沿うて，鍾乳石が形成される状態を知ることができる。

福島県岩代国入水石灰洞について

IRIMIZU LIMESTONE CAVERN EROM IWASHIRO FUKUSHIMA PREFECTUGE, JAPAN

三本杉　巳代治

MIYOJI SAMBONSUGI

緒　　言

石灰岩体の中における石灰洞は普通に見られる現象ではあるるがその規模や洞内の景観が非常によく残っていものは比較的少ない。入水鍾乳洞はその規模においては，山口県の秋吉秋芳洞，高知県の滝河洞，大分県の風蓮洞には及ばないが，小規模ながら洞内において，鍾乳石，石柱，石筍等多種多様保存されており，これら成生の機巧等を推定するに興味ある資料となるものが存在する。本石灰洞は，昭和9年に文部省天然記念物として指定せられて以来一般人の来訪者も次第に多くなった。しかしてこれらの天然に形成せられた現象がいかに長年月を要したものであるかを考え，その貴重なる文化資料に対し，これを保護する必要のあることを認識していただきたいと思い，ここに主として鍾乳洞について地質学的な観察と考察を試みた。この調査は昭和34年8月3日より5日まで現地の調査を行った外，更にこれまで調査によって明かにされた資料を参考としてこれに加えてまとめたものである。この調査に参加した福島大学学芸学部学生，渡辺専一，佐藤正利，伊藤雄，付属中学校教諭小林四郎氏等の御協力に対し深甚なる謝意を表する。また磐城セメントKK四倉工場運転課採鉱係長二宮晋輔氏よりは貴重なる鍾乳石の資料の貸与（一部寄贈）を受けた同氏の御好意に対し感謝する次第である。また案内の労をとられた滝根町教育委員会各位および鈴木菊意氏に対しても厚く御礼を述べたい。また本調査の費用の一部は福島県教育委員会より支給せられたものであることを明記して謝意を表したい。

入水鍾乳洞発見の歴史

この鍾乳洞は福島県田村郡滝根町大字菅谷仙台平にあり，磐越東線，菅谷駅下車，これより徒歩にて約2キロにして現地に達することが出来る。

この鍾乳洞は第1洞と第2洞とがあり前者は昭和2年2月25日に鈴木菊意，瀬生明，佐藤晋男によって発見された。また後者は昭4年8月26日，鈴木菊意，鈴木広仲，瀬生明，渡辺賢司等によって発見された。（第1図参照）

その後昭和9年12月28日文部省より天然記念物として指定されるまでは自由に出入し，標本の採取等を行ったために目に見える地域が破壊され天然の鍾乳石や石筍等は大部失なわれているが，なお一般の人達が行くのに困難な地域には今なお千古の謎（a puzzle）を秘めた天然の彫刻が無数に見られ造化の妙にただ驚歎するのみである。

地形及び地質

入水鍾乳洞を形成する岩石は石灰岩及びその間に挾在するホルンフエルス等である。しかしてこの石灰岩は花崗岩類の貫入を受けて結晶質石灰岩となり，化石はほとんど残存しないが一部に海百合の茎らしきものが見られるので恐らく阿武隈山地の周縁部に残存する他の地域の石灰岩と同様に上部石灰紀～二畳紀に属するものと見てよかろう。この石灰岩の成層面は明かでないがところどころに挾在するホルンフエルスの片理からみてその走向は北20°土西または東で北西または西南に60°内外傾斜しているよう

である。これらの資料からその厚さを推定すると750m内外である。しかしてこれらの結晶質石灰岩は，炭酸ガスを含む地表水等の風火，侵蝕を受け，特殊なカルスト地形 Karst-topography を形成し，ま吸込穴（Doline）等も多数存在する。特に北方の駒ケ鼻付近には多数に存在し，直径10～20糎内外で深さ数糎の漏斗状の地形が見ることができる。（plate-1）

岩石学的特質

本石灰岩は古生代の末期において阿武隈陸塊の縁辺に浅海相として堆積したものと推定されるが次第に陸化したために石灰岩相の上位には粘土質の岩石が存在している。しかしてこれらの堆積岩はその後（おそらく古生代の末期から中生代の中頃の間）において，花崗岩類の貫入を受けて接触変成作用 Contact-metamarphism を蒙っている。しかして貫入した岩石は角閃石—黒雲母—花崗閃緑岩（Hornblende biotite-Grano-diorlte）であるがその構成鉱物は黒雲母（Biotite）ヂルコン（Zircon）楣石（sphene）石英（Quarty）曹長石（albite）正長石（Orthoclase）の絹雲母化（sericitization）を蒙っているもの及び apatite 等よりなっている。しかしてこれらの岩石が上記の堆積岩の成層面に貫入して接触変質を与えている。そのために石灰岩の大部分は結晶質の石灰岩となり各粒は方解石ととっている。各結晶粒の大きさは7～8㎜程度のものが最も多く，また微細なるものは0.5㎜程度のものも認められる，而してこれらの各結晶粒中には，step 状に移動しているものまたわん曲（Bending）していることを暗示するものである。また粘土質の岩石は次に示すような，ルンフェルス（Horufels）となっている。

(A) High-Grade type（高度変質型）

O-3-Diopside-Zircon-apatite-biatite-quartz-hornfels

透輝石—ヂルコン—燐灰石—黒雲母—石英—ホールンフェルス

O-11-Diopsidl-hornblende-hematite-quarrz-hornfels

透輝石—角閃石—赤鉄鉱—石英—ホルンフェルス

O-12 Diopside-hematite-hornfels

透輝石—角閃石—赤鉄鉱—ホルンフェルス

O-13 Diopside-hornblende-biotite-albite-quartz-hornfels

透輝石—角閃石—黒雲母—曹長石—石英—ホルンフェルス

O-16 Grossularite-hornblende-biotite-zircon-hematite-fels

灰礬柘榴石—角閃石—黒雲—ヂルコン—ホルンフェルス

(B) Low grade type〔低度変質型〕

O-5 Biotite-Muscovite-hematite-quartg-hornfels

黒雲母—母雲母—赤鉄鉱—石英—ホルンフェルス

O-6 Hornblende-biotite-quartz-hornfels

角閃石—黒雲母—石英—ホルンフェルス

O-9 Hornblende-magnetlte-sphene-zircon-hornfels

角閃石—黒雲母—楣石—ヂルコン—ホルンフェルス

O-16 Hornblende-Blotite-magnetiTe-aatlte-sphene-Calcite-hornfels

角閃石—黒雲母—磁鉄鉱—燐灰石—楣石—方解石—ホルンフェルス

等を区別することが出来る。

鍾乳洞の規模と形状

この鍾乳洞は種々の屈曲をしているがその方向はやや南北を示している。この方向はこの石灰岩地層の走向とやや一致しているものである。さらに北50°～70°西の方向の平行な断層群によって切られて，これが本石灰洞の構造を複雑化したものと思われる。故にこの鍾乳洞には大なる空洞は少なく，多くは

漸く人間の通過の可能な平板状の空洞が多いことも以上のような成因的な結果にほかならない。

第一洞の延長は約400 m である。さらにその 奥に第二洞が存在するのであるが今回はそこまで調査することはできなかったが 従来の調査によると約 300 m が確められている。（附図 I ）しかし垂直にはは相当体くまで洞のCrack 又は fissue を確めることが出来入口よりは奥地までの高低差は垂直に30 m 以上に及び常に20～30 m の高さの fissue が存在することが明かがある。而ししてこの fissuse の下部は部分により異なるも一部には土砂または，礫を堆積しているところも見られるが多くは石岩を露出して時に滝ま又は pot-hole（瓶孔）を形成しつつ多量の地下水が流れている。また地表のLoline（吸乳孔）と接続する部分は多量の枯土が堆積している。

鍾乳洞内の水温と気温

洞内の水温は11°C～11.5C でほとんど同一があるが気温は入口に近いほど高く，入口に近いイモリ岩附近に於ては 18.5°C，落磐洞附近及音楽洞附近は 14.5C である。これより奥に進むに従って次第に低下して 12.5°C となり第一洞の最も奥に行くと（約500 m）水温は 11°C で気温と水温とはほとんど相違がなくなる。

鍾乳石 Stalactite 及石筍 Stalagmite について

石灰洞内に二次的結晶作用によって形成される水滴石 dropsuone の主なるものは鍾乳石 stalactiteと石筍 stalagmite であるがこれを詳細に観察するときは上記の何れにも属さないとものも存在する。今これらの形状並にその分類について考察してみたい。

〔A〕鍾乳石stalactite（類）Group

今回の入水鍾乳内に於て見られる鍾乳石は次の如さものがある。

（i）α型普通の型の鍾乳石 Normal type-Stalctite

これは最も正常なdrip stone 円筒状でその断面はは円に近く，且つ中心には小孔があり，その周囲に年輪状に発達して帯状構造 Zonol structure を呈するものである。（第六図版3-a b～8）表面は一般に滑らかである。そしてその先端に小孔を有し且つ結晶面（ITOI）が見られる。

(ii) β型の単結晶鍾乳石（monocrytallnie stactite)

下部と根の密着部とが同大にして且つその密着部には山もみ皮 Mouunta in leather 質のものを結晶の中心に含有してゐる，この場合の成長は極みて順調に成長し，且つ先端まで同大であって先端は同一の壁開を示している。（第6図版1）

(iii) γ-型のStalactite

二つの鍾乳石が同時に成長したものが，途中に於て結合して一つの結晶として成長したものである（第6図版4）

(iv) β-型 Stolactite

最初は一つの Stolactite として結晶を初めたものであるが，その成長の途中に於て，多くの方向から $CaCO_3$ の Solian の供給によって，多数の鍾乳石が簇生しているものである。この場合は各結晶面に微細な結晶が形成されて鮫肌状を呈しゝいる（第7図8版）

(v) δ-型

これは全くある特定な一方向より Solation の供給を受けた場合もある。

（a） 望遠鏡型一鍾乳石（Telescope-stoatite)

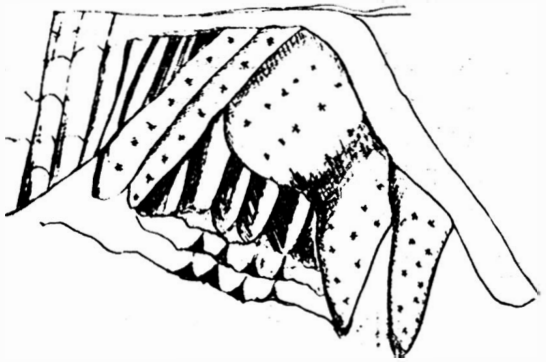
（b） 胡桃状一鍾乳石（Walout-Stolactite)

（c） 節状一鍾乳石（Comb-structure-Stolactite)

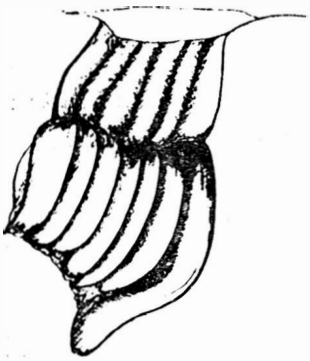
第1図 鍾乳石の種類

Ⓐ 望遠鏡

Ⓒ 節状鍾乳石



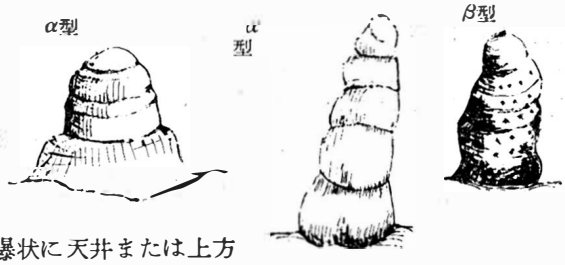
Ⓑ 胡桃状鍾乳石



石筍 (Sralgamite)

これは fissure の天井より形成された Stalactire の下端より滴下して形成されたもので，その形状は，次のようである。

(1) α—型
(2) β—型
(3) γ—型



これはfissure の岩壁上に $CaCO_3$ の Solutionが飛瀑状に天井または上方より落下して側壁 (Wall) に付着して形成されたもので，場所によって多数に付着している。その大きさは2～5 cm大のもので多数の枝を出して珊瑚状をなしている。

石柱 (Column)

これは Stalactite と Stalagmite とが合着したものであって，その形状は種々ある。而してその成生の過程及びその形態上より次の様に区別して記述する。

α型石柱　この場合には二つの部分が接合した点は最も細くなっている。

β型石柱（第8図版2）

これは上部，すなわち鍾乳石には多くの点に小枝を分岐しているものがある。これは比較的潤たくな Solution によって単時間の間に形成されたものであろう。

葉片状石柱

半石柱 Semi-Column

これは岩壁に一部接触して形成されているもので次の様な型がみられる。

竹節状半石柱　Knobbly shaped semi column.

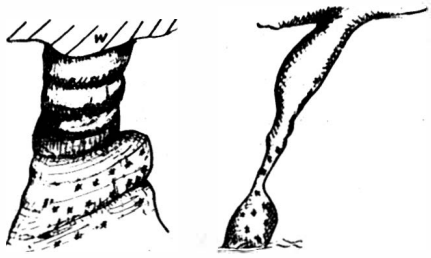
環状半石柱　Ring-shcped semi column.

三日月型皿石　Csescent moon-dish.

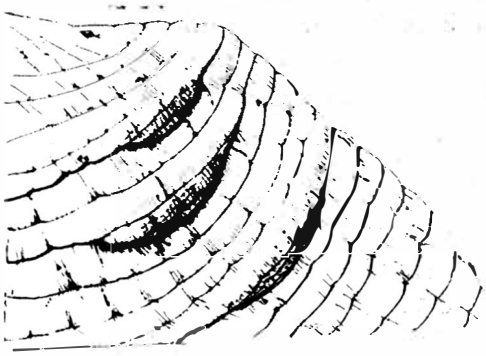
これは半円型又は緩凸斜面に $CaCO_3$の Solution が流れた場合に形成されたもので一つの石灰沈澱物 Calcareous sintes である。三日月形の浅い dish 又は pocket が形成されるものである。その大きさは10～20cmの長さと，深さ10cm内外のものである。これは $CaCO_3$ を溶かした地下水が Crack の表面的に流動したものであろうが特に多量且つ速い流速を持った部分に於て流れが回転運動を起した為にこのような三日月形の皿状の沈澱物が形成されたものであろう。

第2図 石柱及び皿石

α 型石柱



三日月型皿石



鍾乳洞形成の機巧について

この入水鍾乳洞の形成の機巧として次の三つの時期が（stage）推定される。

（a）構造運動によって石灰岩中にFissure（裂罅）または断層が形成された。

（b）これと関連して Granitie socks（花崗岩類）が貫入して該石灰岩に Contact-metamorphism（接触変質作用）の作用をなした。その貫入の時期に就ては Post permian（後二畳紀）Pre-tertiary で恐らく中生代の，ある時期であろう。

（c）地表水（Vadose-Water）が侵透して Cavern を形成し，その化学的作用として，鍾乳石や石筍が形成されたものである，而して，これらの主なる形成作用が如何なる時代になされたかを確め，どれだけの時間を経過したかを確めることは非常に興味のある問題であるが，これは今後に残された非常に困難な問題である。

鍾乳石成生の順序

鍾乳石は方解石の単一結晶，又は数個の結晶からなる場合もあるが（管状鍾乳管）普通は多くの方解石の集合体をなし，種々の形状を呈するものである。

而してこれの形成の過程を考察してみよう。

石灰岩は大部分が方解石（$CaCO_3$）から出来ている。なお，不純物として Dolomite（Mg. Ca）$(CO_3)_2$ が不混在している。而して純粋なる水に於ては，方解石は不溶解である。しかし，少量の Corbonic acib$H_2(CO_3)$ が附加された場合には，化学的な風化が急激に行われる。しかしてこの炭酸は，炭酸ガスと水との給合によって形成されたもので，これは普通の自然水に含まれている。しかして Carbunic acid は方解石に作用して重炭酸カルシウム $Ca(HCO_3)_2$ の可溶性の物質を形成する。而してもしもこれが再沈澱されないときは，溶液中に溶されて海中に運ばれるものである。

而して方解石の Process (1) は次のような説明が与えられている。

方解石の結晶構造は Ca^{2+} と $(CO_3)^{2-}$ ion（イオン）はわずかに歪んだ格子によつて配列しているが，それは Nacl の格子によく類似している。すなわち Nacl の格子を Ca^{2+} は Na^{+} を置換し $(CO_3)^{2-}$ は Cl^{-} を置換している。$(CO_3)^{2-}$ イオンは三角グループの一つであって一つの炭素は三つの酸素と互に対をなして結合している。そして各は平面に存在する。而して風化作用又は溶解作用は $(CO_3)^{2-}$ グープ上に H^{+} イオンが到達したときに行われるものである。それ以来CとOとの結合よりもOとHとの結合が強くなる。そしてHイオンは $(CO_3)^{2-}$ のO原子の一つを抜き取ってしまう。而して残りの二つの酸素は炭素の原子と共に炭酸ガスとして残存する。

Ca^{2+} イオン（カルシウム，イオン）は二つの負の重炭酸イオン $(HCO_3)^{-}$ と結合してその溶液中に重炭酸カルシウムを与える。これらの化学反応は次の様に説明することが出来る。

(1) P. H. KUENEN : Realms of water (1955) P. 212-216

$2H_2O+2CO_2 \rightleftarrows 2H_2CO_3$

$2H_2CO_3=2H^++2(HCO_{33})^-$

$2H^++2(HCO_3)^-+$方解石（Calcite）$\rightleftarrows H_2O+CO_2+Ca^{2+}+2(HCO_3)^-$

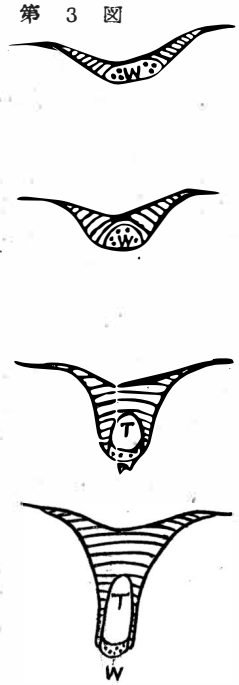
このような作用によって Fracture 又は断層による破砕帯の部分が溶解し去られたであろうが，また一部には方解石として再結晶し始める。而してこのようにして一度溶解せられた方解石の溶液が二回目に結晶によって形成されたかを知る資料は乏しいが，如何なる物理的状態に於て形成されたかは，ある程度推定出来る。

（a）鍾乳管（Tube-stalctite）の成生状態

鍾乳石特に同一の形状を保つ硝子管状の成生については既に脇水鉄五郎氏：(1) が巧みに説明しているのでそれを引用する。

鍾乳石が出来るのは洞窟の天井に炭酸石灰の溶液が僅かに潤ほしている場合は天井の突起部に水が集まり，静かに泡をなして滴下するときにその周期が相当長いので，その墜する場合に炭酸カルシウムの沈澱が起り，鍾乳石の成長が始まる。

第 3 図



その沈澱は最初は氷滴の座の周囲に蛇の目型になり，それが少しく成長すると第三図の如くになる。これは恰かも火口壁に類した様な形となり，ここに溜る水滴の座は縮まつて火口壁様の内側だけの大きさに制限せられ，且つ水滴の形も上下に長目のものに変ってくる。そしてこの間の炭酸石灰の沈澱は火口壁の下端にのみ起ることになる。

而して沈澱が火口壁様の下端にのみ集中される事になると，この火口壁様のものは，だんだん下に向って伸びることになる。水滴の重さとその表面張力とが平衡を保つ様になって，火口壁の直径は一定不変のものとなる。水滴の直径は実験上約5ミリであるが，実際に於てもややこれに一致し，隣接する石灰岩探掘場に於て発見されたものは，内径5ミリ，管の外形の直径は6ミリを示し，またその長さは約100ミリ以上である。

而してこの鍾乳管は全く同一の条件に於て，比較的短い期間に於て単一の結晶が成長したものと推定される。北海道のエゾ蟠竜洞(2)に於ては滴下頻度が10～30秒の間隙が知られているが，本石灰洞に於てはこれよりも遅い部分と，また非常に多くの水滴を認められる部分もある。しかしこのようは，乳管はその滴下の Period が長く，且つ同一の状態であったようである。Allison によれば，管状鍾乳石の成長速度は空気流通の度合に水滴の滴下頻度 (2) に関係し，空気の流通がよく，滴下頻度の小さい場合，すなわち水溶液の濃縮に効果的な条件に於ては成長速度が大となる。すなわち滴下頻度1滴，3秒～80分の範囲ではその成長は毎月0.1～1.44ミリであり，頻度が数十分程度であると管が直線的に成長せずに瘤つきになる。

（d）単結晶鍾乳石（Monocrystalline sarlactite）（第6図版，Fig-1）

この鍾乳石は比較的稀なもので，純粋な方解石の全く同一の状態に於て一の結晶が形成されたものである。長さ約19ミリ，直径2ミリ程度で表面は滑らかで且つ波状の起伏があるが，基部から下端まで殆んど同一の太さである。そしてその下端は全く同一方向の劈開（1011）が見られる。結晶が単結晶として成長し得る限界の成長速度，すなわち臨界成長速度は生長端面積の四乗に逆比例する。

従って，たとえ濃縮の度合が不変に保たれたとしても管状鍾乳石の尖端成長については充分臨界以下の成長速度が管壁の Lateral growth についてはもはや臨界を越えたものとなり，当然そこに多数の新しい結晶核を発生するものだと考える。この意味に於て管状体の方位を維持してそのまま単結晶に成長

：(1) 脇水鉄五郎：鍾乳石考本章 No. 6 P11（昭昭7年）

：(2) 後藤優：北海道上川郡当麻村エゾ蟠竜洞鍾乳石について 鉱物学雑誌第36巻第5号P58

したこの試料は極めて珍らしいもので，その結晶成長の条件の緩慢なことを示すものである。（石灰採掘場産）

（c）普通の鍾乳石の成長

新らしい結晶粒の管壁上に，全く結晶軸の方向を異にした結晶が晶出する場合にはこれを epitaxy と称している。而してこの epitaxy の見地から鍾乳石は三種類に分類することが出来る。

（i）星状の芯を有する鍾乳石で且つ Concentric に発達したもの

（ii）原形の管状体を有する鍾乳石で年輪状の縞を以て Concentic に発達したもの

（i）は中心の管状体自身が外え成長すると同時に，管壁表面の諸所に異方位の新結晶が発生するためにそれら新結晶の成長に伴って，中心の管状体が遂に星状をなして内部に包まれてしまう場合に形成される。この場合内部が結晶質であり外部に著しく非晶質の様な帯で包まていることがあり，四つの異なった帯が認められる。外側に至るに従って褐色を帯び粘土を混入しているのをみる。これはその形成される時期に四つの異なった化学的な溶液によって形成されたことを意味するもので，この鍾乳石の最後の stage は相当の多雨期であったことが推定される。

（ii）は管状態自身は太さを増すことなく成長するが管の外壁に発生した新結晶の Lateral growth によって太さを増す場合に形成される。この場合中心より Concentric の配列をなす年輪状を示し Periodic growth をしたことがわかる。

鍾乳洞と人類

鍾乳洞は特殊な地下景観を吾人に与えるのみでなく，冲積人類の住家として利用されたことは，石灰洞中より発見された人骨またわ文化遺物によって明かである。また古代人類は鍾乳石を薬石として利用されたことは正倉御物の薬石のなかに，鍾乳石が3個残っていることによっても明かである。支那古文献，神農本経には

味甘温，主欬逆上気，明目，益精安五臓，通百節，利九窮，下乳計とある。

また名医別録には，

益気，補虚損，療脚弱，疼冷，下焦傷竭，強陰，久服延年，益寿，好顔色，不老とあり，鍾乳石に強壮強精の効があることが謳われている。また晋代の寒食散と云う奇薬の処方に鍾乳石が参加しているのもこの石の気味，主治効能にかんがみうなづける。〔完〕

---

(3) 益富寿之助；正倉院薬物を中心とす古代石薬の研究：正倉院の鉱物（1957）P-68

(附)　指　定　資　料

1．指定までの経過

昭和2年8月25日，田村郡滝根町在住の鈴木菊意，蒲生明，佐藤留男の3名により発見され，同年9月には，村長佐藤庸治らが保存運動を起し，渡辺万次郎，小檜山農夫雄らの学者グループの調査が行われ，昭和4年9月「滝根カルスト地方」として指定申請が出された。

同7年11月放牧組合長白石徳弥の名により指定には異存ないが，採草地保存のために，制限のないよう陳情があった。一方郡山営林署は，8年11月保存を強力にすすめるよう同意が出され，8年12月，村長博多蔵人が代表となって指定を促進し，文部省の承認を得て昭和8年12月11日附県告示第672号をもって県報に登載，12月18日附官報告示に福島県告示第1号として仮指定された。

仮　指　定　地

田村郡滝根村大字菅谷字仙台平

国有林62林班ノ1　　26.79㌶

同　　山根村大字早稲川字早稲川

国有林61林班ノ1　　11.02㌶

ところが，9年3月にいたり，磐城セメント株式会社と，滝根村博多村長らが指定反対運動をおこし県庁に出頭陳情を行った。これに対して発見者蒲生明は，反対運動を批判して，指定を支持する等の問題があったが，昭和9年12月28日天然記念物として，本指定を受けて，紛争に終止符をうった。

これより先，昭和9年1月16日附をもって発見者鈴木菊意は，本指定の上管理者決定まで，管理者臨時嘱託に任命されているが，指定と同時に，国有林であるから管理者は農林省所管となり，臨時管理者の職がとかれたが，鈴木菊意，蒲生明らの努力は多とすべきものがある。

2．天然記念物指定

昭和9年12月28日　官報告示第312号

所 在 地　福島県田村郡滝根村大字菅谷字仙台平　　山根村大字早稲川字早稲川

指定地積　国有林　実測38町1段2畝15歩

説　　明

結晶質石灰岩ヨリ成レル滝根カルスト台地ノ東側ヲ流ルル早稲川ノ水が1ドリーネヲ通シテ台地ノ下ニ伏流ヲナシ石灰岩ヲ溶カシテ洞窟ヲ作リタルモノナリ，洞窟ハ台地ノ西側ニ開口シ夫ヨリ洞内ニ入ルヲ得，洞内水甚ダ多クシテ急流ヲナシ，所々ニ瀑布ヲ懸ケ又深キ甌穴アリテ跋渉ノ困難ナルコト他ニ多ク其の比ヲ見ズ，サレド鍾乳石，石筍，石柱，石幕等ノ洞内沈澱物ハ割合ニ能ク保存セラルルヲ見ル。

指定ノ事由

保存要目　天然記念物中地質鉱物ノ部第7ニ依ル。

保存ノ要件

洞内沈澱物ヲ採取スルコトハ絶対ニ之ヲ禁止シ，其ノ他現状ノ変更ハ公益上必要已ムヲ得サル場合ノ外之ヲ許可セサルコトヲ要ス。

福島県文化財調査報告書第８集

福島県埋蔵文化財調査報告書

１９６０

福 島 県 教 育 委 員 会

目　　次

○郡山市麓山窯跡……梅　宮　　茂… 9

○飯野白山住居跡……梅　宮　　茂…17

○平市横山古墳群……渡　辺　一　雄…21

○勿来市金冠塚古墳……成　田　克　俊
梅　宮　　茂…27

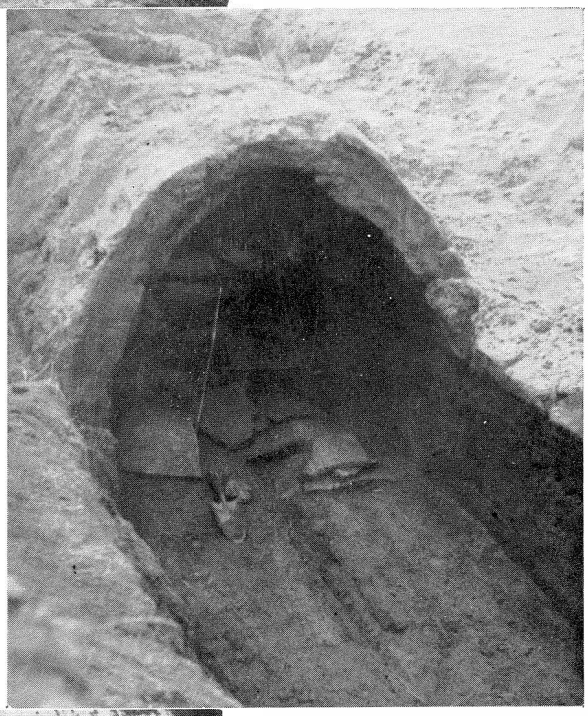
○田村御代田古墳……佐　藤　雄　寿…32

○会津上野尻遺跡……鈴　木　　啓
梅　宮　　茂…33

郡山麓山窯跡

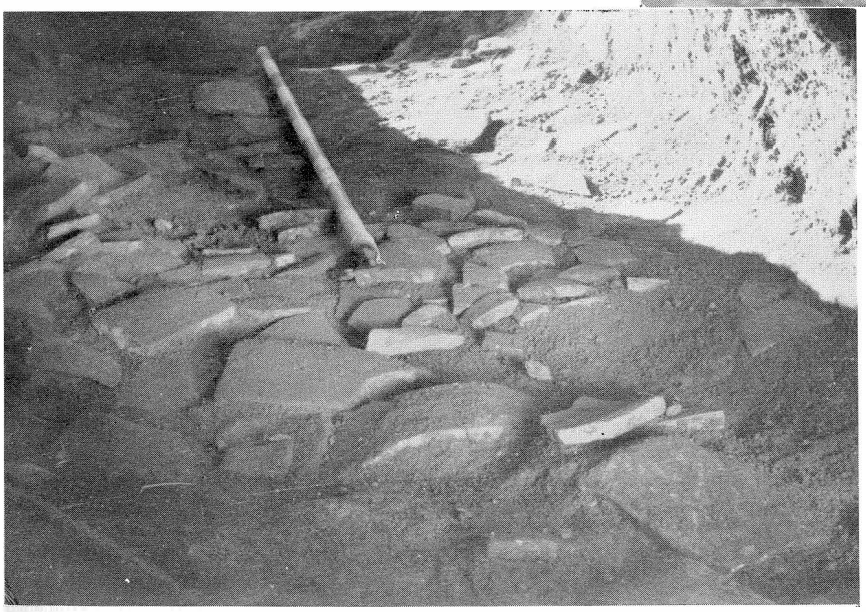
郡山麓山窯跡全景

中央がD、左がB、その上にA、C、E窯が見える。



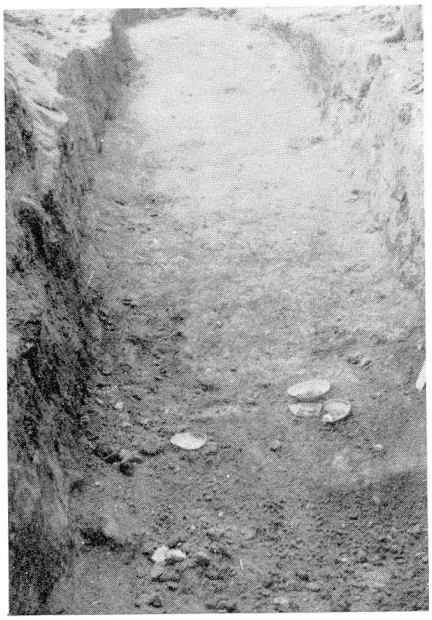
C窯跡

底部に三条の煙道があり、平瓦が充満している。上部に煙出しの穴が見える。

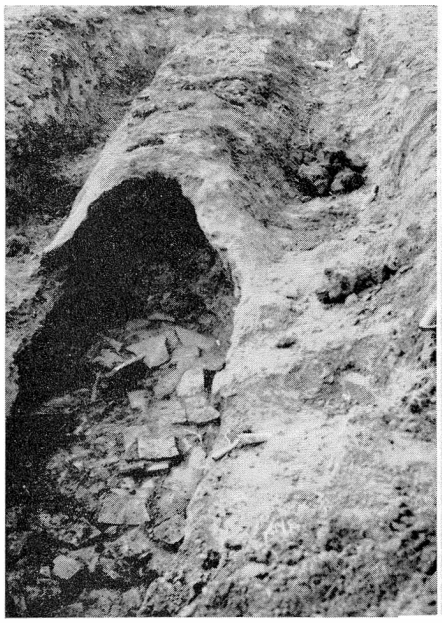


A窯跡の底部

―廃瓦がしきつめられている―



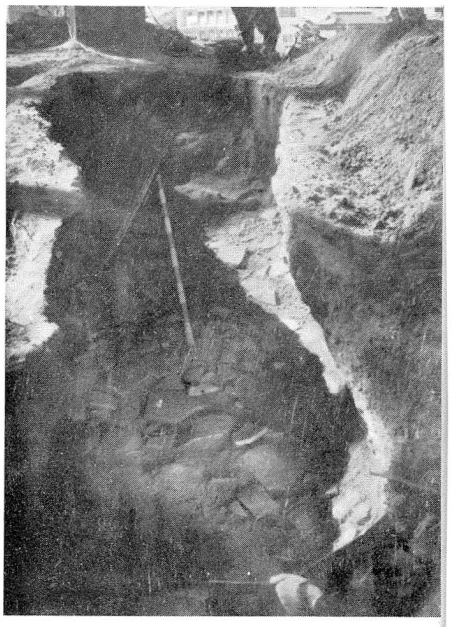
B　　窯　　跡



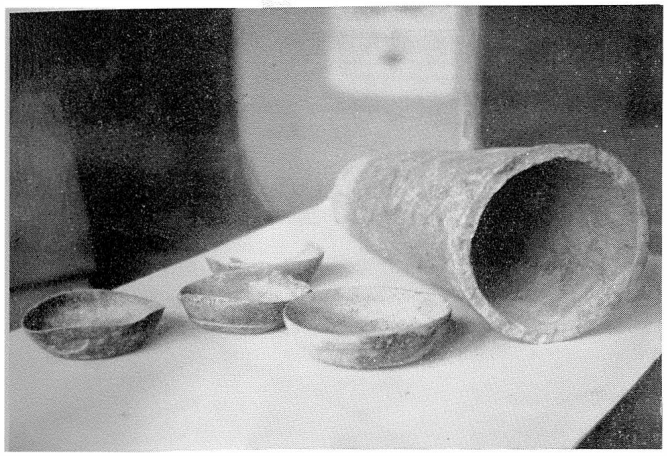
C　　窯　　跡

E　　窯　　跡（筒瓦の出土状況）

D　　窯　　跡

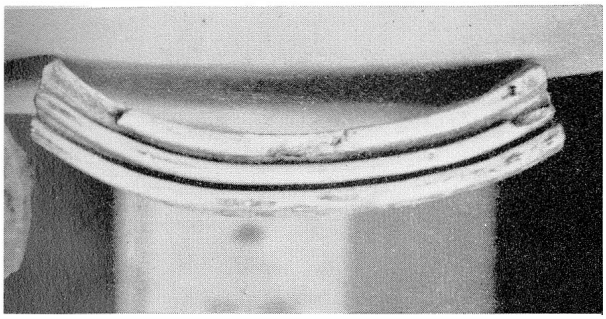


A　窯　跡（天井を崩したところ）



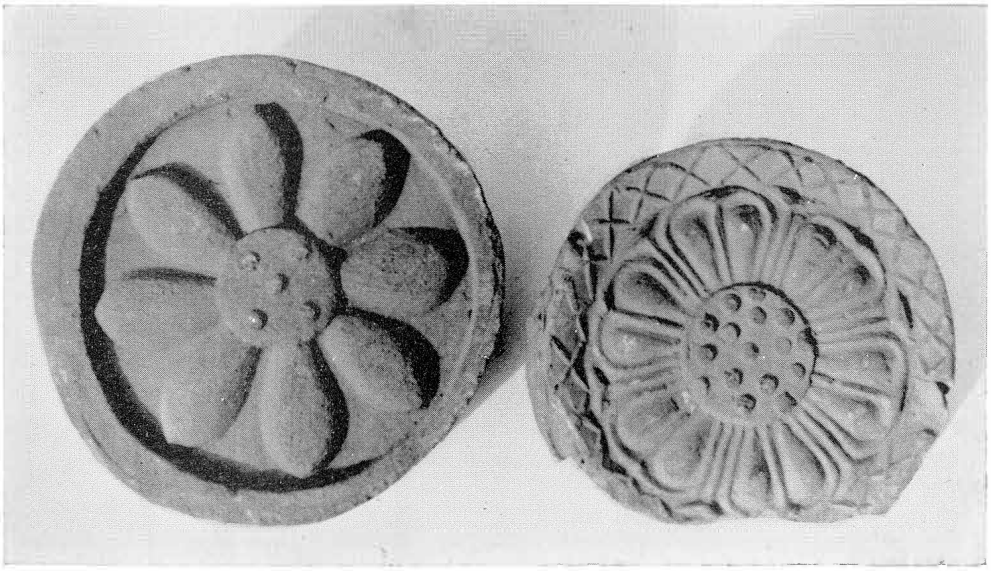
須恵器と筒瓦

鐙瓦の出土状況

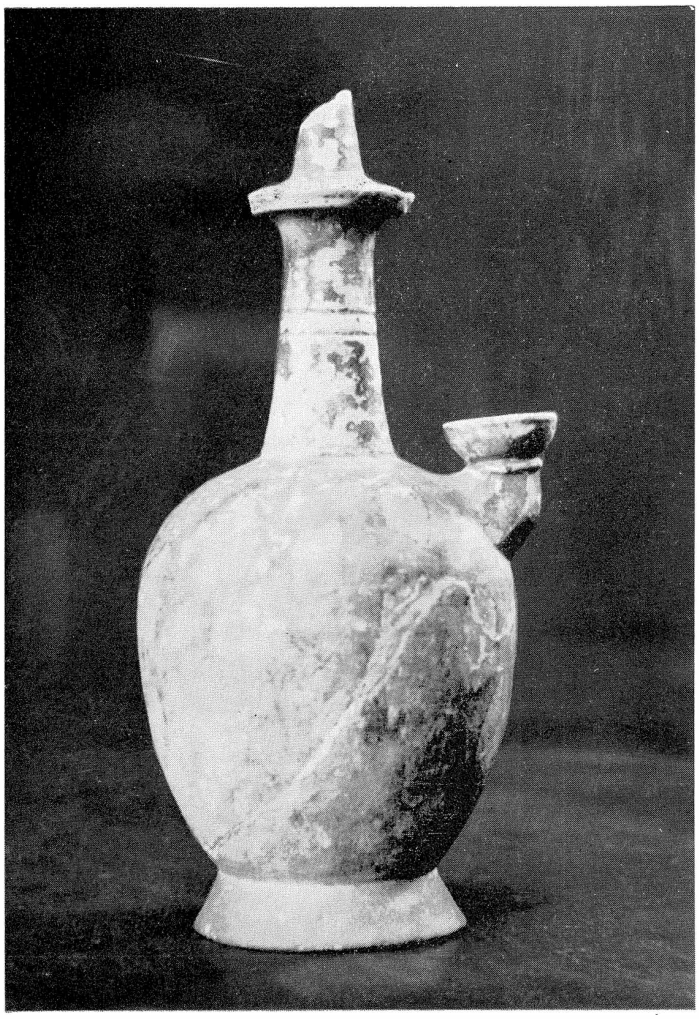


重孤文平瓦

平　　瓦



鐙　　瓦

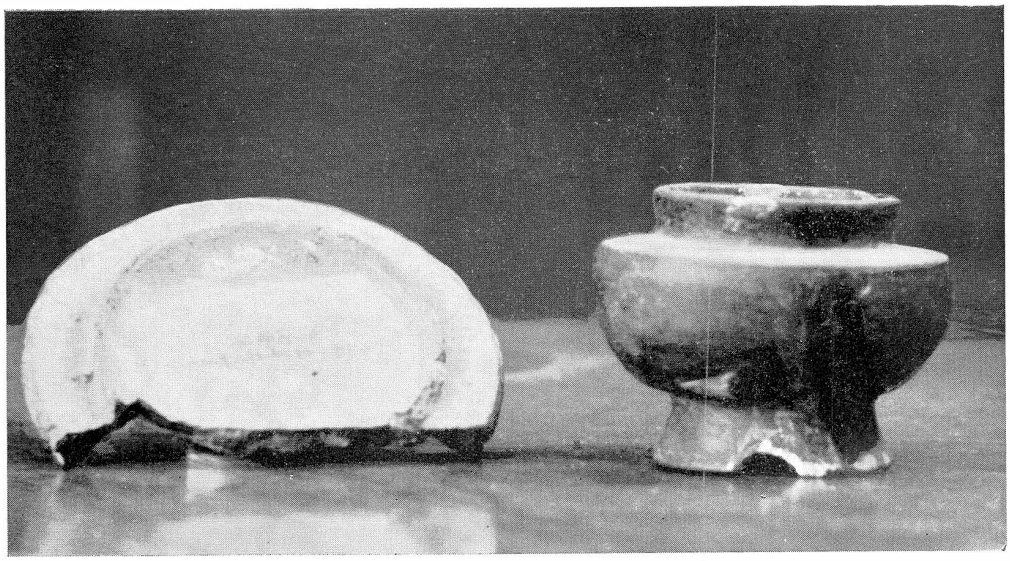


二　彩釉水瓶

郡山市七ツ池出土

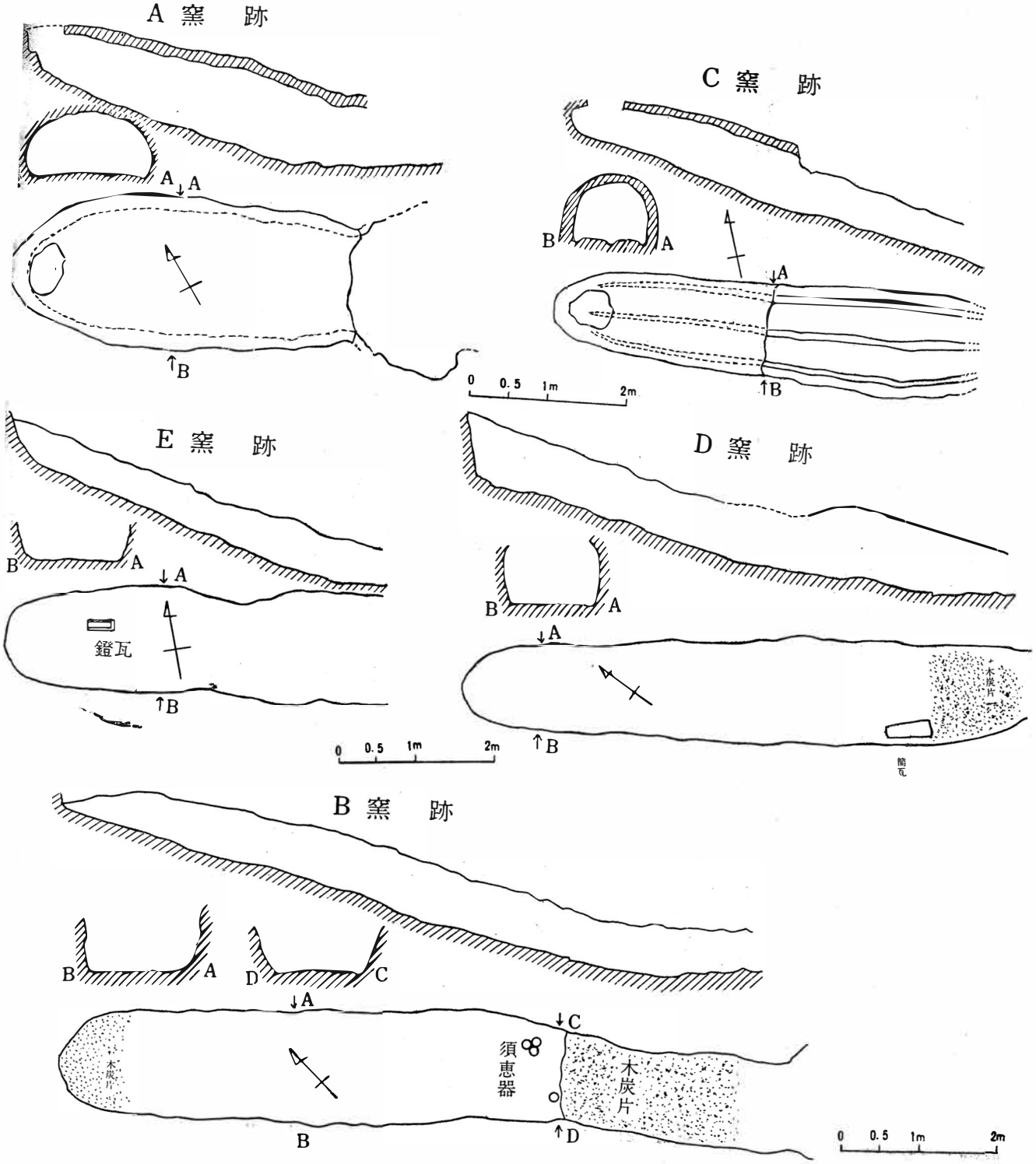
高さ二九糎、口唇部をかく、多少白味をおびた地肌に黄釉と緑釉がかけられている。

手法は唐三彩の技法であるが仿製で、白鳳期を下ることそう遠くない頃、地方窯によってやかれたものであろう。同型の須恵器の水瓶、香炉形瓦器、円面硯とともに発見された。

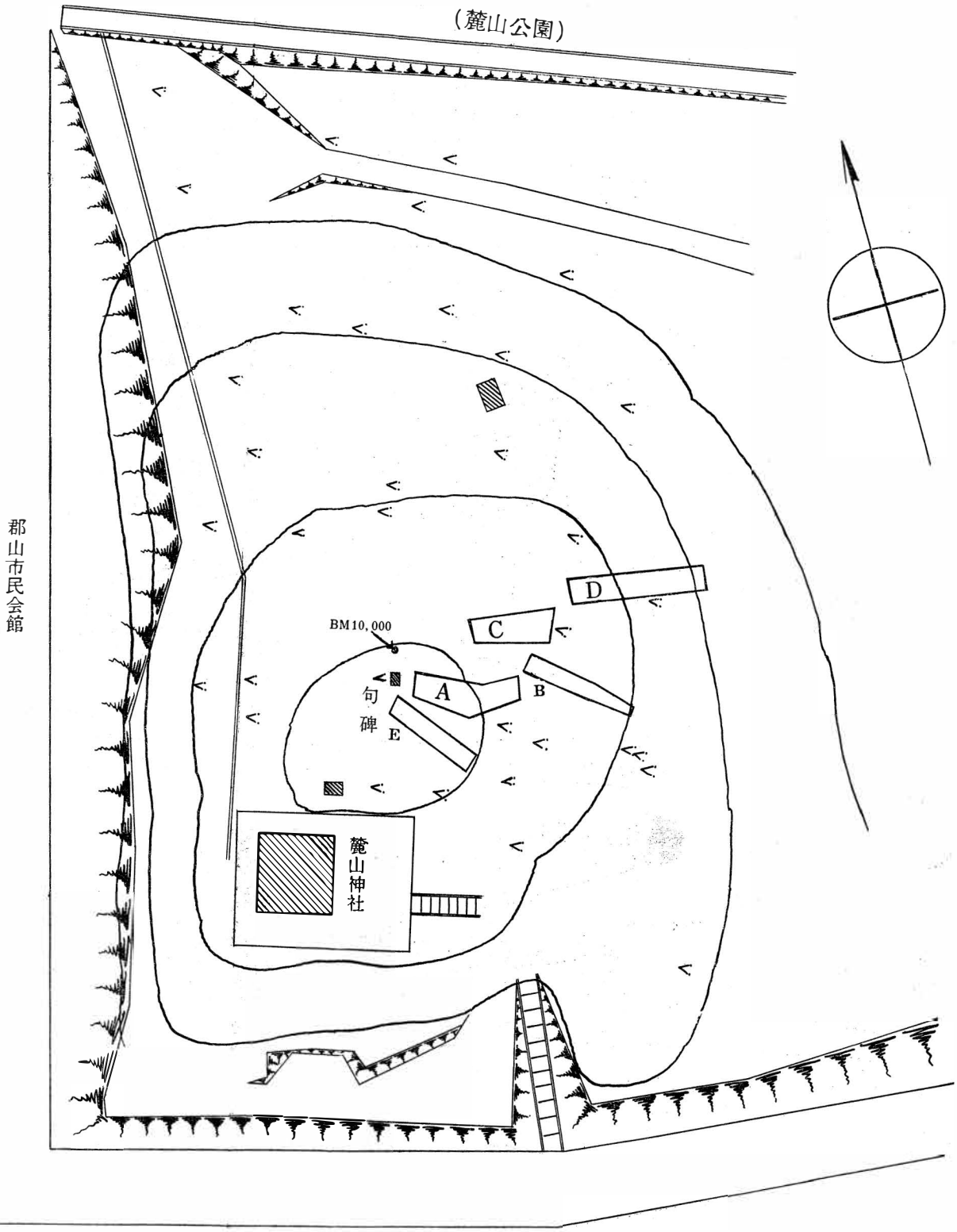


円　面　硯　　香炉形瓦器

郡山市麓山窯跡実測図


A 窯 跡
A
A
B
C 窯 跡
B
A
A
B
0 0.5 1m 2m
E 窯 跡
B
A
A
鐙瓦
B
D 窯 跡
B
A
A
木炭片
B
箇瓦
0 0.5 1m 2m
B 窯 跡
B
A
D
C
A
C
須恵器
木炭片
木炭片
B
D
0 0.5 1m 2m

郡山市麓山窯跡要図



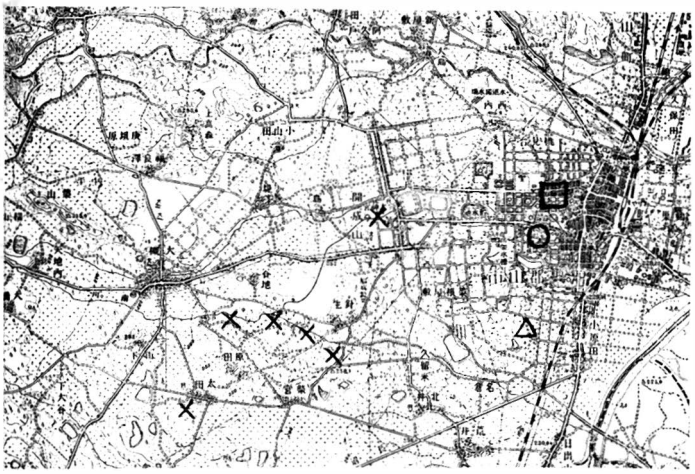
郡山市麓山窯跡調査報告

梅　宮　　茂

1．位　　置

福島県郡山市の中心部，市民会館の東に美しい松林の小山がある。麓山（はやま）といい，旧二本松藩の別園で，麓に池川があり，今は麓山公園といって市民の遊園地である。

山は低地より約10㍍という僅かに起伏している程度の小山で，5万分の1の地理調査所の地形図にも示されていない。山頂に麓山神社があり，この社殿の東に芭蕉の碑があって，その南向きの14度～20度のゆるい傾斜面に古瓦が散在している。



○印　麓山窯跡　×　窯跡　△　七ツ池遺跡

この丘陵は，安積洪積平原が，阿武隈川の沖積原に移行する末端の段丘崖で，周辺が自然浸蝕によって生じた残丘である。全山白色～黄褐色の埴土からなり，北東の山麓（低部）は公園の苑池となっているが，細沼といい，古くは小さな河谷を形成していた川であったといわれる。

発掘地点はこの丘陵の頂上，麓山神社に近い地点でここに，五筒の窯跡があり，さらに未発掘の窯跡は相当数あるものと推定される。

2．調査の経過

昭和33年10月，同山で遊戯中の児童により瓦片が発見され，その一部が市立図書館に保管されていた。明るい黄褐色の重孤文の宇瓦で，厚みも重量もある優れた古瓦であり，現地を視察すると，窯跡とおぼしく傾斜面が赤褐色に焼けている所があり，重要な遺跡と考えられたので，文化財保護委員会に埋蔵文化財発掘届出書を提出し，筆者が発掘担当者として承認され，調査を行う事となったものである。

麓山窯跡発掘調査計画

1．発掘の主体			
郡山市教育委員会	教育長	力丸	剛
2．発掘担当者	県教育委員会社会教育主事	梅宮	茂
3．参加者　調査員	市教委社会教育主事	渡辺	佐市
	同　主事	渡辺	三郎
	市立図書館長	山崎	義人
	同　係	草野	喜久
	福島考古学会員（五中教諭）	成田	克俊
	同　（三中教諭）	佐藤	雄寿

から，このB窯は，A窯よりも早く廃棄されたものであろう。

C窯跡　本群中最も，完全に近く保存されており，天井，煙出の構造が明かにされた。しかしこのC窯は，途中に松の大木があったので全長は明かでなく，発掘もほぼ中央部にトレンチを入れたので，天井は約2.8㍍が残されたのみであった。

このC窯は，A，B窯の中間に位し，約13度南に偏った東南東に位し，調査した長さは5.4㍍推定6㍍はあったろう。幅は84㌢㍍，天井の高さ約80㌢㍍でA窯に比べると極めて細長い構造である。

主室の底部は約18度の傾斜で，両端及び中央に計三条のU字型の煙道が，焚口附近から煙出しまでのびており，完形の平瓦がこの煙道の溝の上に多数重ったまま倒れており，何等かの事情で，焼成を中止したか，放棄したような感がある。

瓦は灰白色に近い黒色瓦で，素文，やや薄手で，D窯の宇瓦より小さく，焼成度も低く焼しまりが悪い。こうした点も本窯が焼成の中途において放棄されたような疑がある。時代的にも最も下降するものであろう。

D窯跡　C窯のさらに右端で，最下位に位する。本調査の端緒となった重孤文の宇瓦，完形に近い平瓦，丸瓦等が児童により発見されたのはこの窯跡である。

ここは他の4窯跡と異り，白色粘土層中に営まれていたので，発掘は困難であったが，底部が浅い。残存した側壁は上部で45㌢㍍，最深61㌢㍍であるのは，早く天井が崩壊したからであったろう。粘土層中に築かれた窯であるから，壁も底部も赤色を呈して美しく，出土する瓦も明るい黄褐色である。

焚口燃焼室は破壊されて確認されないが，粘土質がうすく，混土層が落ち込んでいたあたりが焚口であったように思われる。推定長さ4.5㍍幅1.36㍍，底の傾斜20度，A窯につぐ幅が広いが，煙出しから3㍍のあたりで右側の側壁がくびれている。

この窯跡は，瓦片の量が少い反面優れたものを出土している。崩壊したと推定される天井の上部と思われるあたりに，大型の平瓦，丸瓦があり，表面採集された前記重孤文の宇瓦や平瓦，丸瓦も同じ状態に出土したのではなかったかと思われる。上端から1.4㍍主軸からやや右側にかたよって，完形に近い一鐙瓦が出土した。これは単弁八葉の蓮花文で底部に接して，唯1個置きわすれたように出土した。この窯跡も早く廃棄されたものであろう。

E窯跡　A窯の左で神社に近く，ほぼA窯と平行し，近接しているが，東より南に55度偏った南南西の方向にある。この窯跡は，煙出の部が半円形に露出していたので上部から下方に向って逆に発掘したが，天井は一部保存されていたが後世地形に変化があったと見えて最も深い。焚口が未発掘であるが推定すると長さは約7㍍幅1.3㍍，舌状の窯で天井は約1㍍，主室の底部は約14度を呈し，焚口部は平坦になりここに木炭層が多く，左側にかたよって，丸瓦が半分に切断されることなく，めずらしい筒瓦となって発見された。

このE窯の瓦は他よりも焼しまりよく，格子文縄文が多く窯全体が黒色をおびているが，赤色と黒色の二色の瓦が，ほぼ同量発見され，須恵器の破片1個があった。

以上5個の窯跡を通観すると，A窯のみ，焚口部がくびれた袋状で，B，C，Eは同じ舌状を呈し，Dは，その中間の形式であり，焼成品からみると，Bは須恵器が多く，他は瓦を中心とし，焼成度，瓦の文様形式も窯によってほぼ異っている。

総体的にみると，山の低位にあるものは比較的古く放棄され，次第に山の中腹に移動したものようで頂上に近いものは比較的新しいように見られる。しかしE窯はその中間かもしれない。

このことは，さらに未発掘の窯があるので，全地域の調査を了しないと結論は出されないが一応の想定として提示しておく。

4．出　土　遺　物

本窯跡は，B窯跡の如く，須恵器を主として焼いた窯もあるが，大部分は瓦を焼いた窯で，その多く

は平瓦で，C窯跡の如きは全部が平瓦，AとDに若干丸瓦が見える。総計すれば，出土した瓦片は，おびただしい大量であるが，古瓦の鑑別に重要とされる，鐙瓦や宇瓦が少い。調査は窯の主室を中心にやったので灰捨場を精査する時間的な余裕がなかったので，廃棄されて堆積した箇所に手がのびなかったのにも基因しようが，本窯跡の他に，これらの瓦を焼いた窯があったのではなかろうか。

単弁八葉蓮花文鐙瓦　唯1個D窯より出土した。径18.5㌢㍍，周縁の高さ1㌢㍍弱一条の隆起帯があって，単弁八葉の蓮花文が平面的形式的に表現されている。弁形は輪廓のみ隆起線で表現し，蓮弁には厚みもふくらみもない平板そのもので，ただ隣に接する。間弁（小花）のみ，わづかに内反し小葉も細く短い。中央の子房は径4㌢㍍で小さく，高さ0.8㌢㍍で低い，蓮子は小さな8個を配している。色は明るい黄褐色である。

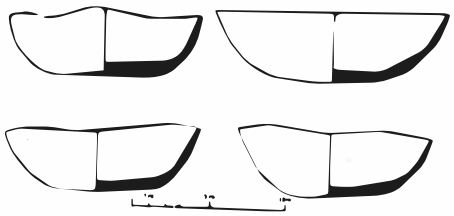
作は極めて形式化された平面的な手法であり，相馬郡鹿島町横手廃寺跡出土の鐙瓦にこの手法がみられる。横手廃寺跡は，造り出しのある大きな塔礎石があり，ここから格子文，縄文を施した平瓦と共に出土するが，手法からみて平安初期に下降するものであろう。本鐙瓦は横手廃寺瓦に比すれば遙によいが，やはり平安期に下るものと思われる。

重孤文宇瓦　D窯の上層より出土したものであるが，幅29㌢㍍，残存部長さ19㌢㍍，厚さ4.5㌢㍍の重厚な宇瓦で，正面に2本の凹みを施して三条の孤文を表現している。

この手法をもつ宇瓦は，県下においては，白河五箇，福島腰浜，原町館前，京塚沢，標葉郡山等からも出土しているが様式上から奈良時代に上り得るであろう。

製作過程を示す筒瓦　E窯跡から出土したものである。筒瓦というと誤解をまねきやすいが，実は丸瓦が切断されないままに焼かれたものである。太い方の径19㌢㍍，細い方の径11㌢㍍，長さ41.5㌢㍍で土管を思わせるが，二カ所に切断用の切れ目がついているので，丸瓦製作の過程を示す貴重なものである。あやまって切断を忘れたものか，計画的に筒状のまま焼いたものかは，出土状況からは理解できない。

須恵器実測図



（B窯出土須恵器の坏）

須恵器坏　B窯から4個出土している径13～15㌢㍍，高さ3.4～4.5㌢㍍ほぼ同形の坏でロクロの跡がある薄手の丸底で，窯変して湾曲している。この他にB窯からは波状文のあるもの，高台をもつもの裏と表に青海波の叩き文のあるもの等の破片が相当量出土しているが，未整理につき後日発表することとする。

5．考　　察

本遺跡に古瓦が出土し，それが窯跡であることは今まで知られていなかった。しかし，郡山市の清水台を中心として，瓦が古くから出土しており，その代表的なものは，市内の如宝寺，安積国造神社，新国西新氏，（円寿寺）阿部金助（市収入役）及び市立図書館に蔵されている。このうち阿部氏所蔵の鐙瓦は白河五箇廃寺跡の白鳳期の鐙瓦と同じ重弁蓮花文鐙瓦である。円寿寺の宇瓦には，正面に一種特有の植物模様が印附されたものがある。

宇瓦の正面に一本の茎の左右に葉をつけた，一見桔梗の茎に似たもの，或は主幹に多くの細枝を配置したような扁行的文様をもつ様式について内藤政恒氏は，同地伴出の他の古瓦類に徴して，あるいは奈良時代の製作に係るものかも知れない (1) といっている。

郡山市周辺の古瓦は，旧市内では清水台から茶臼館にかけて，さらに芳山小学校附近の鐘堂，富田，

開成山から大槻町の南半地帯にかけて10余カ所があるが多くは窯跡のようであり，大槻の花輪長者伝説地には特異な単弁の蓮華文のある鐙瓦が発見されている（写真版参照）。これらの瓦は，古くは白鳳期に該当するものから平安初期に及ぶものと見られるので，本遺跡は，これらの窯跡とほぼ同じ時代に同一の目的をもって構築されたものであろう。

さて，これらの瓦出土地のうち，清水台を中心とする地区は，虎丸長者の屋敷跡といわれ，長者伝説に因む茶臼館，皿沼，鐘堂，堂後，堂前等の地名があり，古くから市街地になったので確実な礎石はおさえ難えが，長者の屋敷跡と称するものは寺院跡とみられる。虎丸長者といわれる人物の本質はとらえ難いが，安達郡二本松市杉田の郡山にも長者宮というところがあって同じ虎丸長者が語られているが，古くから蕃居していた豪族としての阿尺国造家を指すものとみられる。

従来ともすると郡山市が明治以降の目ざましい進展にとらわれて，郡山市には古い歴史的背景のない新興都市といわれているが果してそうであるか改めて当市古代文化を考察してみよう。

安積地方の古代文化といえば，多くは大槻の古墳群と片平があげられる。勿論この地方は，安積文化史の上には重要であるかが，古墳文化の母体となった弥生式遺跡は大槻の外に，阿武隈川沿岸にも分布する。富久山町の日東紡工場の南西にかけては古墳群があり，その一部と見なされるものは横塚附近にもある。横塚という地名が古墳より生じたものであることは自明の理である。

大槻に数十基の古墳があるからとて大槻が古代文化の中心地とみることはできない。大槻古墳群は囮に行くほど未期的で，奈良時代に近い築造と推定されるが，東の開成山近くには，近時，人物，馬等の形象埴輪が発見された古墳がある。片平の如きは安積山の古歌と結びつけて考えられるが，ここは大槻よりも史料が少くかえって開発が下降している証拠がある。つまり郡山市の西部高燥な地帯も，阿武隈川沿岸の低地も甲乙なく古墳が営造された頃は，古代の居住地であったとみて差支えない。

郡山駅の東方に「方八町」といわれる土地がある。この辺から横塚，鶴巣にかけて土師器が多量に出土している。方八町の地名は，先年の胆沢城の学術調査により明かにされたが，多賀城もこの称があり岩手県においては11カ所同名の土地がある。郡山の方八町については虎丸長者に附随した民話が語られているのみであるが，古代史上注目すべき土地である。(2)

郡山という地名は各所に多く，県下においても杉田の郡山，伊達の桑折（郡）標葉の郡山勿来の郡等がある。これは「郡」の大領が郡家を設けたために生じた地名で，安積郡山は，国造本紀に記された阿尺国造の後裔が，この地に郡家を設けその一族が広大な地域にわたって古くより一大聚落を形成して居住したところである。

奈良時代に入ると，この地方は万葉集によまれるほど都に知れてきた。同書によまれている東北の歌は「黄金花咲く」の外は全部本県のみであるのは，当時本県の文物が中央に知れていたことを証明するものである。安達太良山，安積山の采女がこれである。それは既に安積地方の開発がすすみ，阿尺国造の居住地近くに一大伽藍が建立された。多賀城や陸奥国分寺が仙台の近くに建立されていた頃である。国分寺は官寺で，国家の力により造営されたが，清水台に建てられたこの寺院は，安積の国造家の私財をもって建てられた私寺であって，私寺を建てるだけの文化と経済力がすでにこの地方に生じていたのである。

本窯跡から大槻町南半にかけて10余カ所の窯跡が点在し，多くの瓦と須恵器が発見されるのは，この廃寺に使用された瓦やその居住民の使用した什器を焼いた遺跡で，この地方に於ける一大工業地帯と認めることができ，就中，最も国造居住地に近くにある本窯跡がかくも群集し，小山といえども全山が瓦，須恵器の製作所であったことは，現在工業都市郡山にふさわしい古代遺跡の発見といわれよう。

各地の国造は大化改新に際して，多く地方の郡司に任命され，中央政府より派遣された国司の下部組織として地方民衆の統治に当り，地方の民政を司っていた。従って特例として彼等は依然世襲の職にあり，その地方における統制力，財力は共に国司に優るものがあり，地方における文化の中心をなしたものである。陸奥国分寺出土瓦の中に「尺」の文字瓦がある。これは「阿尺」の略字で，阿尺の国造か安

積の郡司が寄進した瓦であるのは如上のことを物語る一資料である。

安積の古代文化は，古墳末期から奈良時代にかけて大きく進展し，以上のべた諸遺跡はいづれも，地縁的，時間的に相接近しており，一貫した関連性が認められる。もっと具体的にいうならば，これらの遺跡は，奈良時代に於ける安積郡の郡家の一族たる阿尺国造の直系乃至は傍系の子孫と密接な関係があるものと考察され，彼等は高度の中央文化を消化していた。

このことについては，内藤政恒氏が，「福島県郡山市出土の円面硯とその遺跡の性格について」に論述しているところである。(3)

＜二彩釉水瓶＞

さらに，郡山周辺の古代文化が，斬新な中央文化をとり入れていたことを証明するものに，同市小原田円寿寺の新国西新氏所蔵の二彩釉水瓶の発見がある。（写真参照）

二彩釉水瓶は昭和13年11月，本遺跡から直線1.5キロメートルの近接地である字七ッ池129番地から発見されたもので，次のものが一括出土した。

二彩釉水瓶　高さ29センチメートル，胴部最大幅13センチメートル

香炉形瓦器　径約6センチメートル高さ8センチメートル，黒漆の如きものが塗布されている。

須恵器水瓶　高さ約19.5センチメートル，幅8.2センチメートル

円面硯残闕　径10センチメートル

その他　須恵器土師器破片

二彩釉水瓶は全面に白味をおびた黄釉の上に緑釉が斑にかけられている。技法は唐三彩の施釉技術と同じであるが，奈良前期白鳳時代を下ることそう遠くない時代に，地方窯によって製作されたものとみられる。(4)

円面硯は脚と陸の一部が欠けている須恵質で，中心部は平滑で墨痕をとどめている。円面硯は関東北においては稀な存在で，二彩釉水瓶と共に中央文化の香り高い，斬新な文化財である。

七ッ池の遺跡については，経塚の如きものかと見るむきもあるが，同地が前記のとおり，阿尺国造家乃至はその一族の寺院跡，住居跡に近いところであるので，豪族の邸宅の一部か，あるいは埋葬された墳跡と推定されている。

二彩釉の発見は極めて，稀であり，円面硯も前者と同じく奈良時代前期よりあまり下らない時期のもので，両者とも製作技術や焼成土質からみると，地方製作の色濃いもので，恐らく，これらのものは，この地方の工人によって製作されたものであるとするならば，本窯跡を中心とする古代工場地帯において作られたものと考えることは，あながち我田引水の説ではなかろう。

本窯跡（乃至は他の同類の窯跡）において瓦や須恵器等の製作に従事していた工人達の中には，進歩した最新技術を身につけて，二彩釉水瓶や，円面硯も消化し得るものが，存在していたと考えられる。

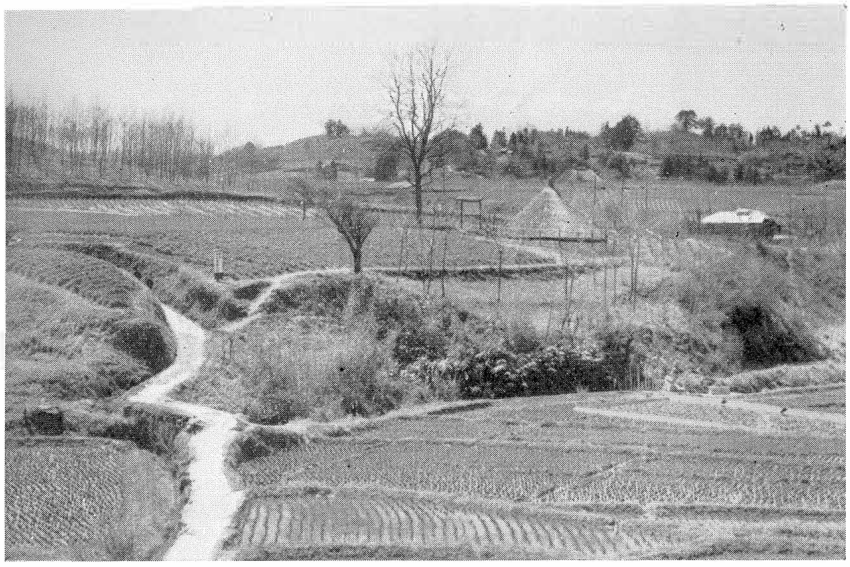
この意味において麓山窯跡の調査結果は，東北の初期仏教文化解明を一歩前進せしめたものと考えて，敢て諸彦の御教示を願う次第である。

（附記）本調査は，他の窯跡や遺跡出土品についても言及し，清水台を中心とする廃寺も詳細調査して論ずる必要があるが，この点については後日調査が進められた暁に本遺跡の再調査を期したいものと思って，調査後，現状を埋没して保存をはかっておいた。

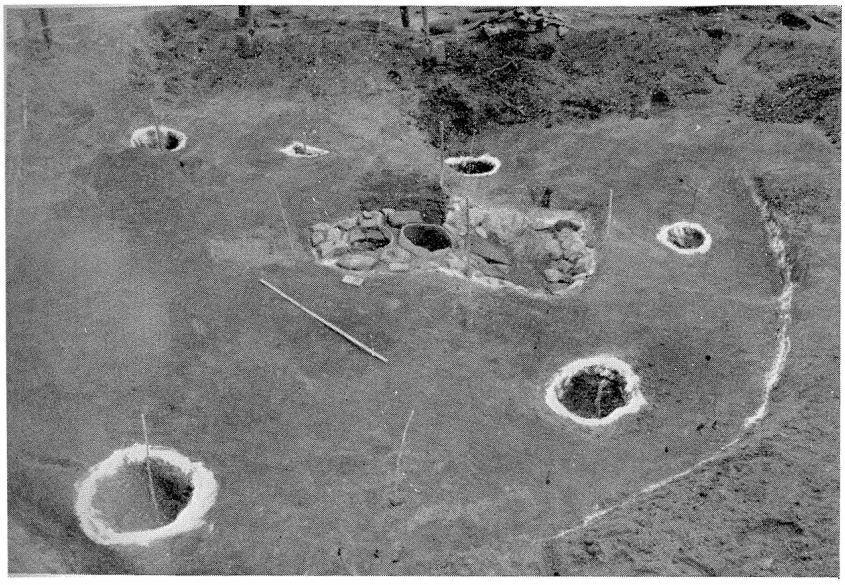
最後に本調査に協力を願った方々及び引用させて戴いた先輩，諸先生方に厚く御礼を申し上げます。

（註）(1)　夢殿論誌第19巻「東北地方出土の特異文様古瓦に就いて」　内藤政恒
(2)　岩手県文化財調査報告書第4集　岩手県教育委員会
(3)　史跡と美術第24集ノ6　内藤政恒
(4)　史学第25巻1号「郡山市七ッ池の二彩釉出土遺跡について」　江坂輝弥

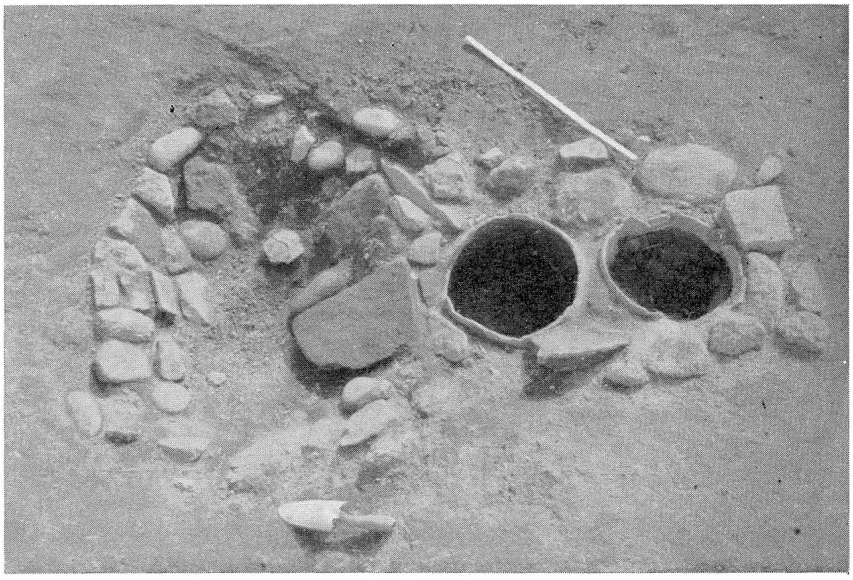
飯野白山住居跡



飯野白山遺跡
中央立木の傍にある円錐形のものが
竪穴住居跡の複原家屋である。



竪穴住居跡
白線でかこむは柱穴
中央が炉である。



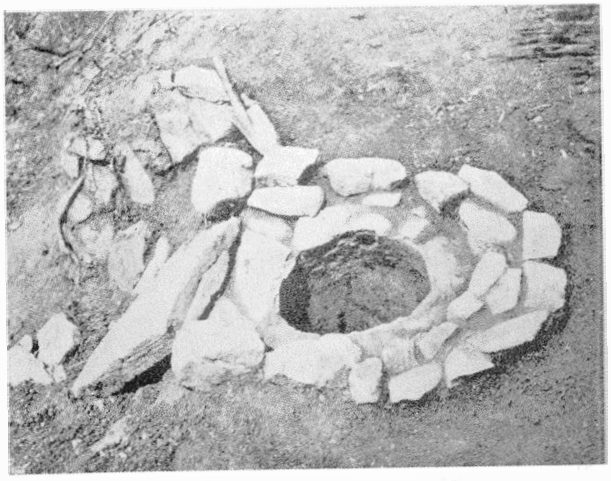
複式炉
楕円形の炉に隣して土器を埋めた火つぼがある。

和台発見の土器
（火つぼBに似ている）

火つぼAに使用された縄文土器

複　式　炉……石川，新屋敷遺跡

複　式　炉……信夫，日向道内遺跡



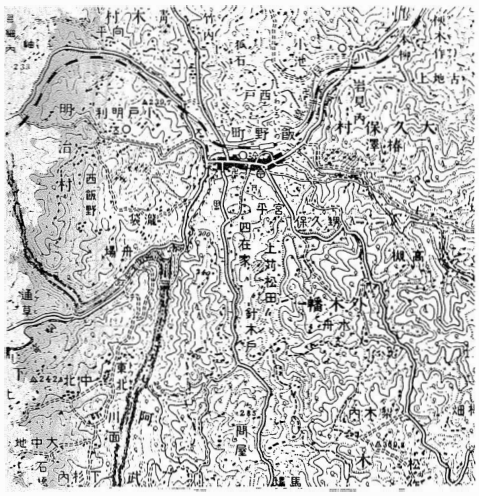
複　式　炉……安達，大沢遺跡

飯野白山住居跡調査報告

梅　宮　　茂

1．発見の経過

昭和32年4月1日午後1時頃，伊達郡飯野町郷土研究家鈴木俊夫氏が地主大内力哉氏の代理として，県教委事務局社会教育課に遺跡が発見されたよしの報告があった。



同地は飯野町大字飯野字白山7番地で，付近は古く開墾されて麦畑，桑畑となっているが，該地点のみ草地として残っていた所を，地主の大内力哉氏父子が開墾中焼土があり，その下から石囲みの炉と土器があらわれたので，鈴木氏に連絡した。鈴木氏は約1時間程発掘したが，2個の土器が併列し，石囲みの状態であるのを認めて当事務局に報告したものである。

重要な遺跡と思われるので土を覆い現況を保存するよう指示し，正規の発掘届出書を提出するようすすめた。その夜のうち，土器に金が入っていたとのうわさが町内に流れ，一部土器を破壊した者があり，また早朝から地方民が押しかけて現況保存が困難な状況であるので，地主は緊急調査を要請したので，4月4日協力を得て調査を実施したものである。

2．位置と現況

同地は国鉄川俣松川線の飯野駅，ならびに青木村より安達郡東和村に通ずる県道の――避病院付近から約5百㍍西方に入った地点で，阿武隈川に流れる細流に臨む，東北に緩傾した丘陵の末端で，一帯は相当古く開墾された所であるが，昭和22年にも住居跡が発見された由である。

この町には，2，3カ所の遺跡がある。阿武隈川に臨む和台は本遺跡の西方，谷をへだてた地点で，過去に数多くの縄文土器石器が発見されており，字小平山36番地においては本遺跡の如き住居跡が発見されたという。また本遺跡地続きの躑躅山には土師式土器を出した住居跡，山頂には古墳と思しき小円墳があり，付近から須恵器が出土している。

4月4日午前11時筆者は鈴木俊夫氏らの案内で現地に赴き，地主大内氏の立会で遺跡を検見すると約4坪にわたり深さ50㌢程掘り返され，その中央に炉と土器の上に，紙・莚を覆い，その上に若干の土がかけてあるが一部に掘り返されて，石の部分が露出していた。

地主大内氏父子の手により被覆物をとり除くと，石囲みの炉に隣して，大小2個の土器が地山まで埋められ，その周囲に数個の石が囲繞し，土器片が数片散在している。これは村人が踏んで破壊した土器片で，炉の中にはやや大きい土器片がある。これは発見当初から現状にあるもののよしである。

3．遺跡の状況

昼食後，見学にきた人々を交えて，次の者が発掘に助力し，午後5時までに円形の竪穴プランをほぼ検出することができた。

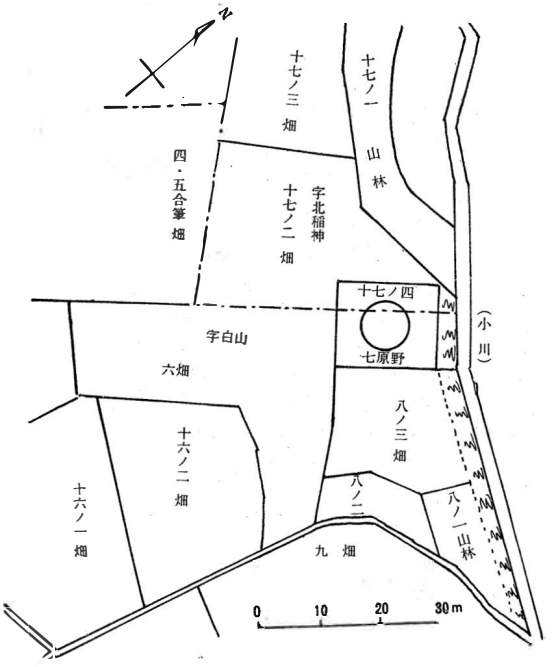
調査参加者

地主	大内力哉	農	高橋辰蔵
同	大内雅勝（写真）	神官	飯久保広国
会社員	鈴木俊夫	僧侶	遠藤楊堂
農	斎藤利雄	土地家屋調査士	関二郎（測量）
同	高橋一三	他に役場，学校職員数名	

◆第1日

調査はまず土器を利用した火壺の口縁部とレベルを同じくする竪穴床面を四方に追究してプランを明かにし，径約5.7㍍～6㍍の範囲に周壁を検出し，円形の竪穴住居跡であることを確認した。

飯野白山住居跡地籍図

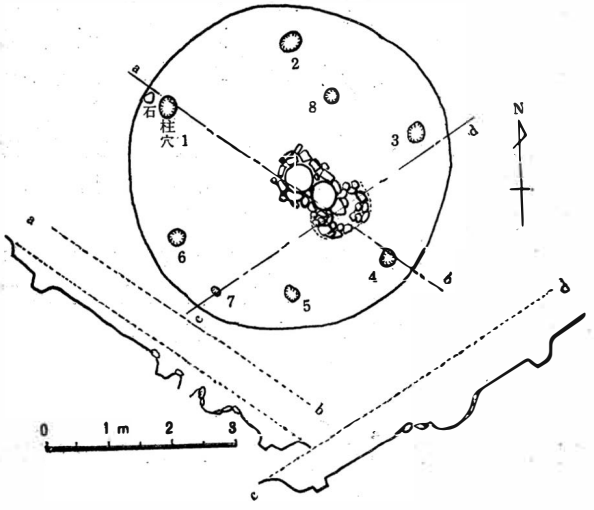


次は柱穴を検出すべく床面を精査すると，土器A（火つぼA）の西・南・北辺にあたり，おびただしい赤色の焼土層があり，その中に，荒い単斜縄文を附した土器や繊維を胎土に混入した土器片が混入していた。土器Bの炉の間から西北2.4㍍の所に柱穴(2)を発見し，続いて(3)(4)(5)(6)4本の主柱を検出した。

次は石囲みの炉を精査するに長径約95㌢短径80㌢深さ約6㌢の舟形に30数個の大小の河原石（礫）によって組みたててあり，底部周辺には木炭片を多く交えた焼土層がある。炉の西端は土器B（火つぼB）に接して同じレベルであるが，東端は約7㌢程低いことが明かにされた。これは4月1日の発掘の際不用意に掘り下げられたこともあるが，当初よりいくらか床面が低くつくられていたようで，この付近は土器片を交えた木炭細屑混入の黒土層があり，この近くに支柱(8)がある。

そこで主柱(4)と炉，土器（火つぼ）を結ぶ線を延長して隣接の桑畑（字北稲神）までトレンチを広げた結果主柱(1)を検出し，さらに主柱(5)と(6)の間に(7)の支柱穴を検出した。

飯野白山住居跡実測図



柱穴(8)と(3)の間はさらに5～6㌢の深さに黒土層が陥ちていることがわかったので精査すると，(3)の柱穴は床面より11㌢程低く，木炭層を交えた黒土層があり，石囲み炉の近くは特に木炭片がおびただしく堆積している。

◆第2日（4月5日）

第1日は遺跡の周囲に杭を建てて保存をはかり作業を終了。

第2日は早朝から炉と土器の被覆物をとり，床面を精査し，写真撮影平板測量を行ない，これと平行して，土器（火つぼA，B）の発掘にとりかかる。

土器Aは径29㌢深さ約23㌢程埋没していて，

ほぼ完全であるが，輪積みの状に亀裂があり，掘り上げた際に崩壊した。後日復原をはかった結果は縄文中期の大木式の9に相当するキャリバー型で，口縁部は若干失われていた。（写真参照）

土器B（火つぼB）はAよりやや大きく径30㌢余の深鉢型で中腹がややくびれて底部がない。下部約3分の1を失ったものを火壺と利用したもので，残存部の深さは約24.5㌢である。両土器は石囲みの炉に隣して一つのピットに並んで埋められ，口縁部の周囲を石で囲んだものと思われ，ピット内の土は赤く焼け，別な中期の土器片が数片混入しており，石器の剝片も検出された。

土器を掘り上げた後は，ピットの深部まで精査した上，原位置に囲みの石を復原した。石囲みの炉は一部分断面をみた上，原形のまま保存し，柱穴は埋めて標識の立札をたてて現状の保存をはかり改めて再調査を行なうこととした。

第2次調査

昭和33年4月，明治大学教授後藤守一先生を迎えて実施することとなった。今回は飯野町教育委員会が派遣申請を出し，一切同委員会が行ない，飯野町中学校長清野潔氏が衝に当った。

前日同中学校において後藤先生歓迎の座談会を開き，次の日氏の指導で残存していた西南部を発掘して周壁を確認した後，破壊されてしまった北西の周壁を復原し，遺跡の保存と，教育資料とするために復原家屋を構築することとなり，後日同氏の設計により，円錐形の復原家屋を構造して保存をはかっている。

4．遺　　物

(一) 石　　器

本遺跡は石器の出土が少ない。本町の他の遺跡は石器が相当量出土し，特に和台遺跡は石器製造所の異名が生ずる程石器を多く出しているが本遺跡は表面採集によって石鏃一箇を得たのみである。4月1日地主が発掘の際は長さ15㌢程ほぼ三角稜の自然石が鍬にかかって発見された。表面が研磨されておりまた腐植土層とローム層の間に平たい石が発見されたよしである。前者は砥石か叩石であろう。他に石英質の剝片，原石とおぼしきもの2，3発見されたのみで，他に見るべきものがない。

(二) 土　　器

(1) 土　器　A（火つぼA）

火つぼAとして利用された土器は口径約29㌢高さ約23㌢，底部径7.8㌢の朝顔形に上半が大きく開いた，一種のキャリバー型で，口縁部は平口のようでやや内傾している。厚さ口縁部において8㍉中程1㌢弱，割に薄手である。焼締りは普通，底部は湿気のためかもろくなり崩壊している。色彩は大部分明るい黄褐色で底部がやや黒ずむ。

文様は9区に分たれ，磨消縄文が施され，曲線，わらび手形の丸い沈線が底部近くまで施され，底部は無文である。型式からみると中期の大木式9に相当する。

(2) 土　器　B（火つぼB）

Aに比して粗製で，全般に黒ずみ，焼締もよくなく，胎土に細い砂礫が認められる。器形は普通の深鉢型で中腹少しくくびれる，口縁部は平口，径約30㌢，胴部はゆるいカーブで底部に及んでいる。残存部の高さ約30㌢で下3分の1程から底部にかけて欠失している。カーブから推定して復原を試みるに，定形の際は深さ60㌢位であろうか。厚さは口縁で1㌢下部1.2㌢。文様は簡単で，口縁付近から底部にかけて細長い楕円形が太い沈線で無雑作にほられ，内外ともに単斜縄文が荒く施されている。この土器と寸分違はない土器が和台（わだい）遺跡から発見されている（写真参照）。

(8) 土　器　片

この竪穴は他に比して土器片も少ないのは，石器の少ないことと共に注意すべきことであろう。

柱穴(8)付近の水炭層の層中から薄手の無文土器と隆起文，彫刻文のある土器片，火つぼ（土器A，B）付近の焼土層の中には異状縄文で胎土に繊維の入っている土器片が数片出ている。

これらの文様からみると前期後葉と火壺の土器と同じ中期の大木9式前後のものとみられる。

なお上層の腐植土中に須恵器の破片と土師器の小片が混入しているが，この遺跡には別に後世の遺跡が重復して，曾って大きな須恵器が発見されたということを附記する。

5．む　す　び

縄文式文化時代の竪穴住居跡に，石囲みの炉や，土器を火つぼとする例は多い。

従来，奥羽南部で発見されるこの期の竪穴住居跡は，関東周辺の例と同じく，円形のプランで，石囲みの炉がほぼ中央に位している場合が多い。炉は円形か馬蹄形，もしくは矩形に数個の石によって構成されているが，本竪穴の炉は，土器を利用した火つぼが二つと，さらにこれに接続して石で構成した炉がある。土器を利用した火つぼと，石囲みの炉の間には大きい平石が境界に斜にたて，3個の炉が一線上に並んでいる。

複式炉について

土器を利用した火つぼと石で構成した炉が1セットとなっているものをここで複式炉と名づける。福島県下には次の例がある。

信夫郡松川町大字水原輪台	日向道内遺跡	（中期末）
安達郡二本松市杉田字稲荷山	大沢遺跡	（後　期）
石川郡石川町新屋敷		（中期末）

◆日向道内遺跡（ひなどうじ）

この遺跡は，東北本線松川駅の東方8㌔の山中にある遺跡で，地主丹野恵の屋敷内の畑で昭和26年6月福島考古学会が一部発掘したが，竪穴のプランは破壊されて不明である。中央とおぼしき所に石囲みの炉と土器を利用した火つぼが並んである。炉は，長さ50㌢幅35㌢三方を平石で囲み，一方（東側）をあけて焚口としている。火つぼの土器は口径23㌢高さ39㌢キャリバー型で，大木式9～10に属する。火つぼと炉の間には，白山遺跡と同じく1枚の平石によって区劃されている。

この1組のセットから西5㍍の所にも同じく土器を埋め，石に囲んだ火つぼがあったが細砕して復原は不能である。（写真参照）

◆杉田大沢遺跡

東北本線沿線の二本松市と本宮町を結ぶ中間の山中にある遺跡で，昭和25年7月安達高等学校生徒会により発掘されたが，口径約30㌢，高さ42㌢の土器の周囲を平石で囲んだ火つぼがあり，これに隣して石囲みの炉があり，火つぼと炉の間には，前例の如く，1枚の大きな平石によって区劃されていたが，これは調査未熟のため破壊されたが残存部の写真によって確認される。なお土器も破壊されて現存しない。（写真参照）

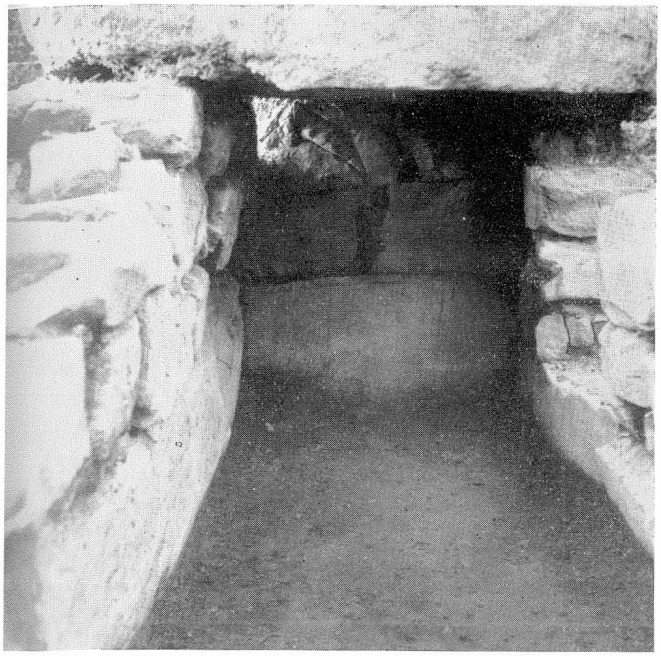
◆新屋敷遺跡

石川町の西方8㌔，阿武隈川上流の河岸段丘に臨む畑地にあり，昭和34年7月農耕中発見された。これも前例の如く土器の周囲を河原石で囲み，その隣に平たい河原石が垂直にたてて炉と区別している。炉は大きな河原石2枚が斜に向き合い，中央に河原石4個がしきつめられている。周囲は火つぼと同じく小石で囲まれた1セットの炉である。この遺跡については，別に報告書が出される予定である。

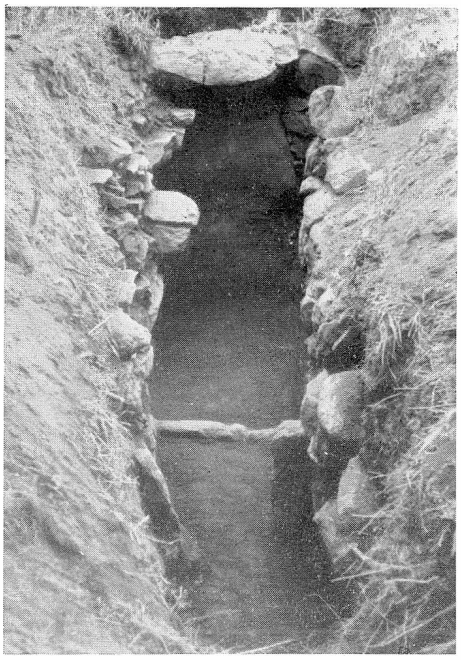
以上の如く僅かな例であるが，縄文中期の末から後期にかけて竪穴住居跡の中央に，石で構成された炉と，土器を埋め，その周囲を石で囲んだ火つぼが1組のセットとして存在する複式炉をもつ住居跡がある。

そのうち本白山遺跡は，複式炉のうちでも火つぼが二つと石の炉と計3個が1セットとなっておりまことに異例である。本遺跡は昭和35年3月福島県史跡として指定保存をはかっている。

石 城 横 山 古 墳 群

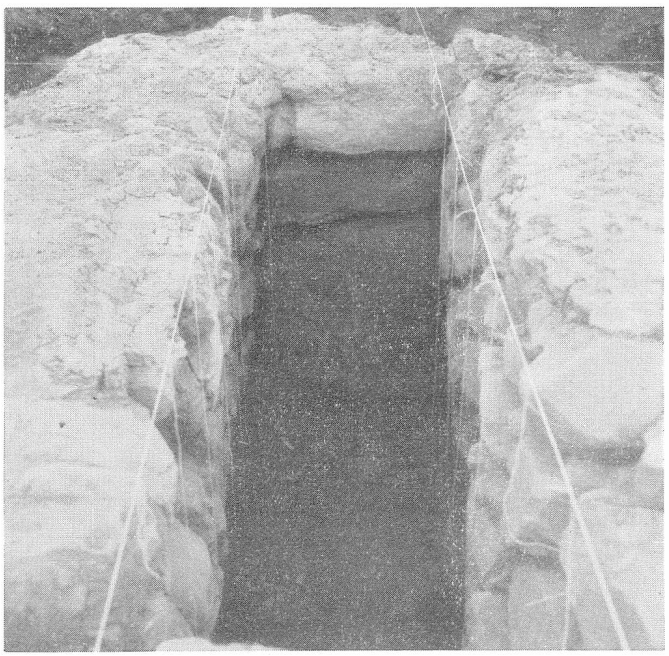


77　号　墳



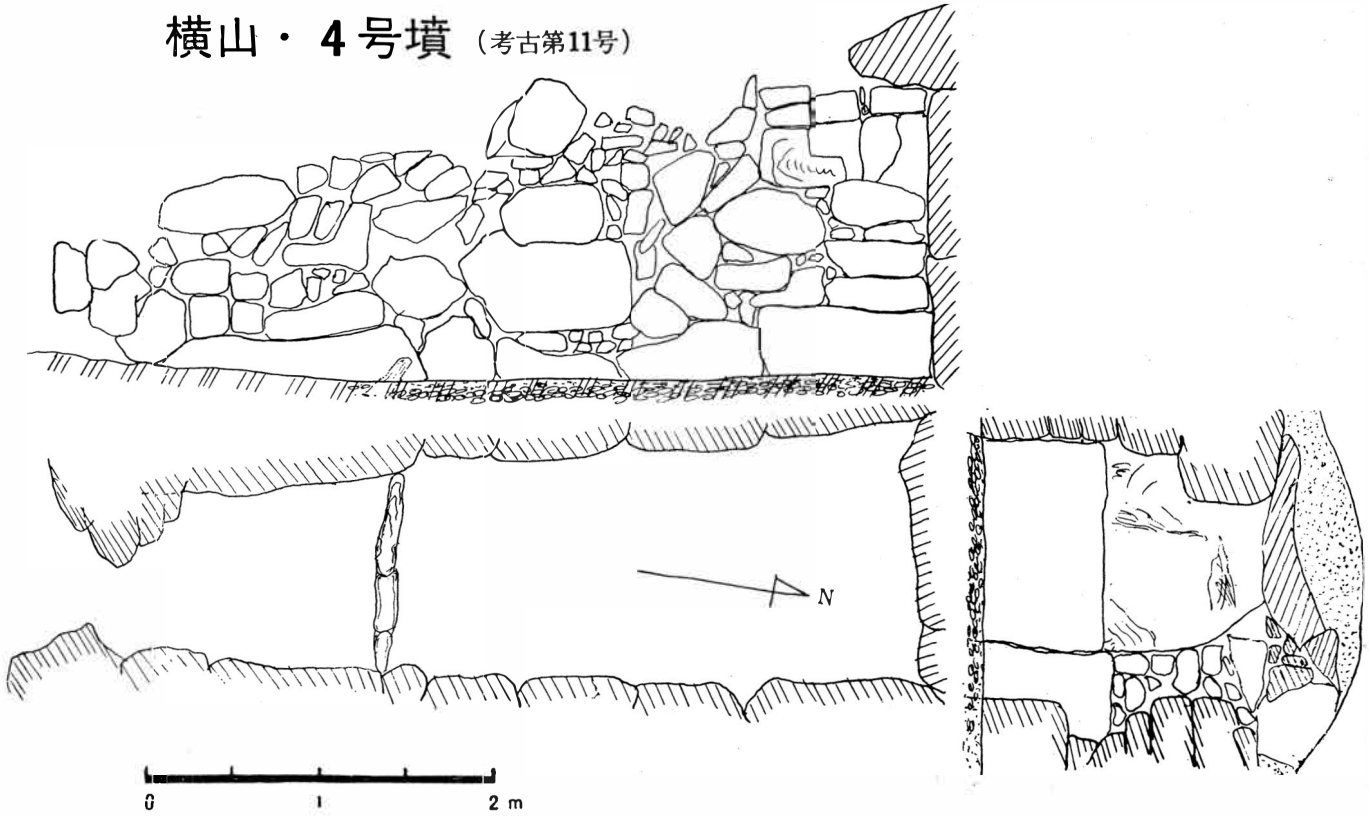
4　号　墳

25　号　墳



78　号　墳

横山・4号墳（考古第11号）



平市横山古墳群の調査

――内部構造小考――

渡　辺　一　雄

平市横山古墳群の調査は，昭和32年11月より33年1月にかけて数次にわたり調査されたもので，次の計画により実施された。

発掘責任者	福島県立磐城高等学校長	橋本憲司
発掘担当者	福島県文化財専門委員	渡部晴雄
	同	赤津千町
調査従事者	福島県立磐城高等学校	史学研究会生徒

この結果については，次のように小報告が出されている。

① 横山古墳群現状調査中間報告　鈴木重美　渡辺誠（考古10号・昭和32年1月）

② 平市横山古墳群第25・78号墳調査予報　磐城高校史学研究会（磐城考古第7号・昭和32年12月）

③ 平市横山古墳群調査報告特集号（考古10号・昭和33年3月）

④ 横山古墳群発掘調査中間報告書　磐城高校史学研究会（昭和34年7月20日）

本報告書は磐城高等学校史学研究会のOBである福島考古学会員渡辺一雄氏に本命題による稿の執筆を求めて印刷に附することにしたものである。（梅宮）

1．位置と分布

横山古墳群は平市上平窪字横山および富岡にあり，小さな谷を隔てた東側の〝須釜〟にも古墳群の分布を見る。

横山古墳群の位置は東に石森山（225 m）を西に水石山および湯ノ嶽を望み得る標高約30㍍の平坦な台地上に存する。南は夏井川沖積平野を眼下にひかえ，北は丘陵となってだんだんと標高を増している。

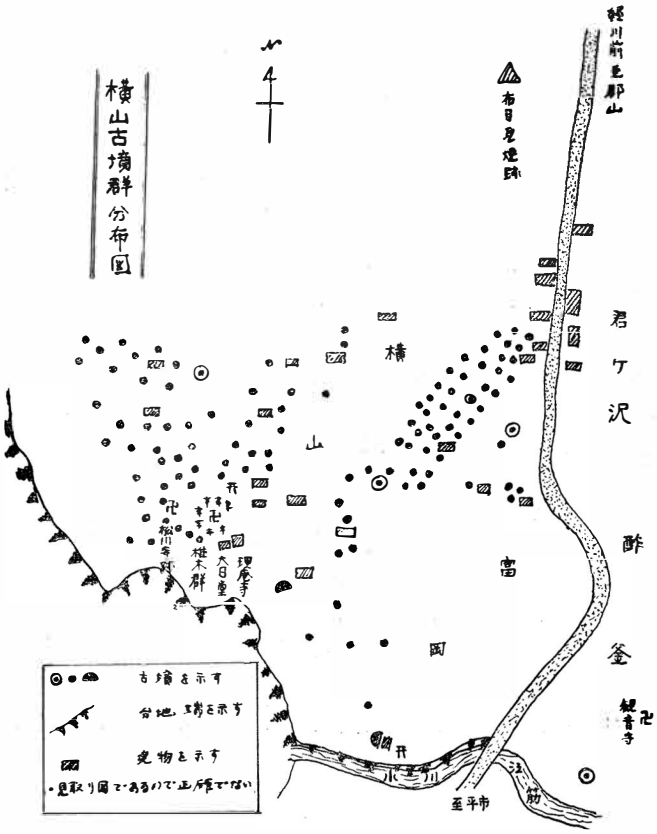
横山古墳群・須釜古墳群ともかなり広く平坦な台地上に存するのであるが，字横山地内に濃密な古墳の分布をみるので「横山古墳群」と命名されている。

当台地は現在住宅地及び畑・果樹園・雑木林等になっているが，果樹園の占める広さが大きい。

古墳総数は100基を超すものと思われるが確認されたものは78基であり，小地域にかなり密なる分布を示しているといえよう。

石城地方の古墳群としては，高久古墳群が有名であり数も多いが，総数は当古墳群よりかなり少ない。この点から本群は石城地方最多数の古墳群であるるいえよう。

なお横山台地は土師器破片の散布はもちろんのこと，縄文中期・晩期および弥生の土器破片の散布もあり，古墳封土中よりも多数の縄文土器片を採集しており，先史時代より生活地として利用していたと考えられる。



2. 遺跡の概況

当古墳群が果樹園の拡張新設や開墾によって荒廃し墳型はもちろんのことその実数すらも明確でなくなっている現状を傍観し得ず，磐城高校史学研究会は，昭和31年5月より7月にかけて4回にわたる表面調査を行ない，古墳の実数調査と所在の確認を試みた。その結果横山地内では総数67基のうち未発掘と思われるのは2基しかないことを知り驚いた。

ほぼ原形をとどめているもの18基，欠損しているもの14基，わずかに痕跡を残すもの19基で，全く封土がなく破壊され平坦となってしまったものが16基もあることがわかった。

しかも日一日となしくずしに破壊は続けられるので，ここに発掘調査を行ない記録にとどめるべく計画をたてたわけである。

当古墳群の盗掘は遠く明治9年頃まで遡り得，明治11年には県が大須賀筠軒先生に命じて調査を行なわしめたことがあって，その後も度々盗掘が続いたので，いかなる副葬品があったかその大部分が不明である。

しかして当古墳群の破壊裏面史には幾多の話題もあるが，ここに記すには余裕もなく本意でもないので省略したい。

発掘調査は現状調査の行なわれた翌32年11月より33年1月にかけて数次にかけて行なわれた。発掘調査古墳数は7基で何れも既盗掘で石室・石棺等の一部露出しているものを選んだ。

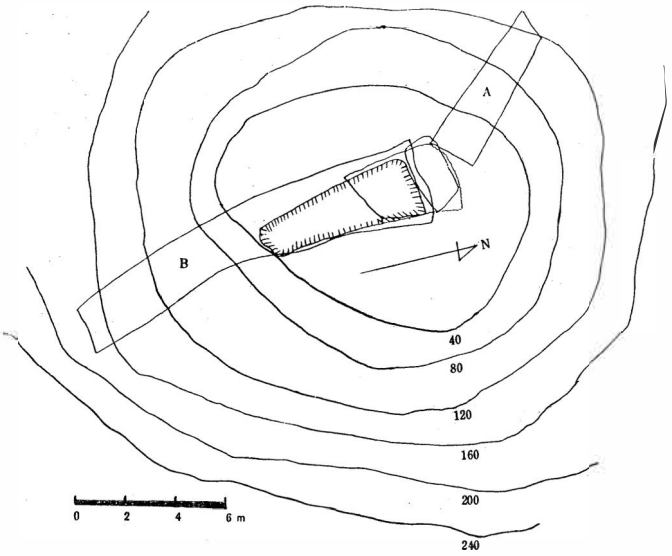
3. 発掘調査

横山古墳群はすべて円墳で，周湟を確認したものは1基のみであった。10m以上は当古墳群では大きい方であるから小規模な円墳の密集群であるといっても過言ではあるまいと思う。

前記資料を参照すると，21号墳は長径6.3m，高さ1.5mで内部構造は不明。25号墳は長径12.8m，高さ1.4mで，組合式箱型石棺である。68号墳は長径12.6m，高さ1.4mで石室はくずれているが横穴式石室と思われる。76号墳は封土なく，組合式箱型石棺であるが，床面より30mまでのみ残存しているのみである。床面には5cmの厚さで砂利を敷いてあり，棺内西側より直刀1本が発見された。4号墳は長径14m，高さ2mで横穴室石室で鉄鏃らしき物があった。77号墳は蓋石が露出し側壁は一部なくなってい

るが，小口積切石横穴式石室と思われる。78号墳は現地表上に蓋石の一部が残存し地表下に積石式縦穴石室として遺構があった。室内より人骨片数片・メノウの曲玉1ケ・刀子1本の出土があった。なお石室内土砂排除中円筒埴輪片がいくつか発見され，付近に散乱していた破片よりほぼ完全な円筒埴輪2ケを復原し得た。しかし該埴輪が何れの古墳と関連を有するものかは不明である。なお4号墳・77号墳・78号墳については次項で少しくわしく述べたい。

遺物としては以上の他に伝聞として耳環・鈴鏡・須恵器等があるが確認できない。しかし土師器・管玉類は現在所有している人があるので確認し得る。



横山4号墳（横山古墳群発掘調査中間報告書）

4. 内部構造

発掘調査した7基のうち21号墳と68号墳は内部構造が崩壊のためよく知り得ないが，ほかの5基については比較的良く残っているのでこれを中心にしていささか述べてみたい。さいわいにして，この5基は何れも同一の内部構造ではないので横山古墳群全体がどのようであったかの推論は避けることにしても興味ある問題と思う。

今までしばしば石室や石棺の考察にあたってはその遺物との関連において比較研究がなされてきたが当古墳のごとく既盗掘の場合には現存した遺物の重要性は当然として，それのみであったと考えることは危険であろうと思うので慎重に扱いたい。

それで，自然石室および石棺にその主眼を置くこととなる。

5基のうち，25号墳および76号墳は何れも石棺と呼ばれるものであり，しかも組合式という点では同類である。由来石城地方では石室があって石棺が内蔵されていた例はなく，ただ一つ横穴式石室内に陶棺があった勿来市後田源道平古墳が知られているのみである。

高久古墳群中の天神塚からは横穴式石室に挎抜石棺と思われるものがあったという報告があるが，どの程度まで確かかわからない。しかし石室内に石棺があっても不思議でないことは当然である。

二つの組合式石棺で異なるのは床面である。側壁は板状の長い岩を組合わせたもので，25号墳は長さ1.75mで，幅は最大で0.32mで小柄であり，76号墳は長さ2.4m幅1.1mで大きいがここに根本的差異を見出すことはできない。しかし床面をみると25号墳は7ケの側壁同様の三沢砂岩の板状のものをならべてあったが東奥壁に接する部分は現存してなかった。一方76号墳はやや広い床面に一面砂利を敷きつめてあったが，直刀は砂利に接してはいないのであるいは砂利層の上に砂か土をかぶせてあったかも知れないが，攪乱後であるので直刀の位置も原位置であるかどうか疑わしい。床面に砂利を敷いた例は横穴式石室ながら，高久天神塚墳・(1)勿来市後田源道平古墳(2)があり，真野古墳群においても砂利小石を敷くのを常とする古墳があって(3)特異な形態とはいえないと考えられる。

遺体埋葬の形態は，76号墳ではどのように置かれたか，23号墳のごとき狭い小さいものはどうであったろうか。幅の最大が32cmしかない点から考えて，仰臥伸葬は不可能であり，横臥伸葬したものと考えている人もあるが，筆者は石棺の深さが床面からわずか24cmしかないところから考えてみても，成人の横臥伸葬も無理で，年少者ではなかったろうかと考えている。

なおかかる組合式箱型石棺は，郡内各地にみられるが，高久201号墳・豊間101号墳では数体の遺体を

横山古墳群調査一覧表

墳号	墳形	石室及び石棺状態	遺物
4号墳	円墳　南北　14m(SN) 東西　12m(EW) 高さ　2m(H)	奥壁←→玄門3m羨門巾0.9m 〃　巾1.45m，巾1.2m蓋石からの玄門←→羨門1.6m 深さ1.64m	鉄鏃らしき物 弥生式土器少々
21号墳	円墳　SN　6.3m EW　5.6m H　1.5m ▲西側片面は削除されている	形状不明	
25号墳	円墳　SN　12.8m EW　12.0m H　1.4m ※中央は雑木林	石棺の一部露出 組立式箱型石棺 長さ1.75m　深さ2.40m　巾{最小0.25m 最大0.32m 平均0.8m}	盛土より縄文式土器破片300余
68号墳	円墳　SN　11.3m EW　12.6m H　1.4m ▲中央は雑木林		北側トレンチより縄文中期とみられる炉跡 縦径71cm　横径50cm 中央よりやや南に縄文中期の土器破片，復元不可能　柱跡は発見できず
77号墳	封土なし，床面より50cmの所のみ現存，他は開こんのため削平蓋石の一部残存　梨畑中にあり	奥壁←→玄門2.3m 玄門←→羨門1.5m 奥壁巾　0.97m 玄門巾　0.85m 羨門　0.70m	鉄鏃らしきもの 弥生式土器片多少
76号墳	封土なし，石棺の床面より30cmの部分のみ残存	組立式箱型石棺 但し床面より30cm迄だけ残存 長さ　2.4m 巾　1.1m	
78号墳	封土なし，蓋石の一部残存 桃畑中に在り	積石式箱型石棺 長さ　1.98m 巾　0.53m 南端に枕石らしき物 深さ1.1m	人骨数片，メノウ製勾玉 刀子一振 埴輪破片

葬っている家墓的意味を持つものであって，(4)当25号墳のごときものと内容を少し異にしている。

次に4号墳と77号墳について考えてみたい。4号墳第1図は奥壁から玄門まで2.6m玄門から羨門まで1.8m玄室の奥壁幅1.2m床面から天井まで2.2mの横穴式石室であり，プランは玄門から奥壁まで大体直線であり笏状をなし，羨門入口は両側壁の石がせり出してあり，羨門と玄室の区別は床面上十数cmの高さで細長い石をやや玄室内に傾けて立ててあるので区別できる。床面上の側壁すなわち下部は比較的大きな岩を大・小種々の岩で乱積してある。床面にはあまり厚くなく玉砂利が敷いてある点，76号墳と同様であった。南北に石室は向いており入口は南側にある。77号墳第2図は一部崩壊しているので全容をつかめ得ないが4号墳と同様の横穴式石室で奥壁両側に接する側壁下部に大きく長い岩を置いてその上に岩を積む形は4号墳と同様であるが，切石積みになっている点整美な感を持つ。

天井石をのせてある点も4号墳と同じであるが，羨道の天井がどのようになっていたかは破壊されていたため不明確である。石室の向きは略東西を示している。

奥壁の構造を考察するには両墳には類似点と相異点を見出すことができる。類似している点は側壁下部にも大きい岩を置いたのと同様の手法で，まず土台として大きな岩を置き，その上に次の岩を積み重ねるようにしてある。案ずるに石室構築の際まず平面上に側壁および奥壁を置いてプランを確かめた上に，次々と積石したものでなかろうかと考えている。異なる点についてみると，4号墳では第1図にみるごとく土台の奥壁が2ケあることであり，しかも東側の小さな土台の岩は何かあとからなおしたようにも考えられる。大きな岩をのせた西側の奥壁に中心があって東側は拡張したように小さな岩を積み重ねてあるのは何を意味するであろうか。単なる岩の加減からかとも思われるが次のようには考えられないであろうか。最初にプランを考える時に一応東側のみの奥壁を置いて天井石まで作った。しかし何か

の都合で，一全く想像であるが木棺やあるいは数体の遺体をおさめるには小さすぎた一大きくする必要があり東側を拡げたと一。第1図にも見るごとく天井石も西側の大きなものと東側の小さなものとはこれをさらに確かにはしないであろうか。77号墳はいわゆる土台の岩の奥壁にも平坦な面を用い，その上にやや小さな岩を2ケのせ，そのさらに上に数ケの小さな岩をのせて天井に続いていることは第2図で伺い見る通りである。

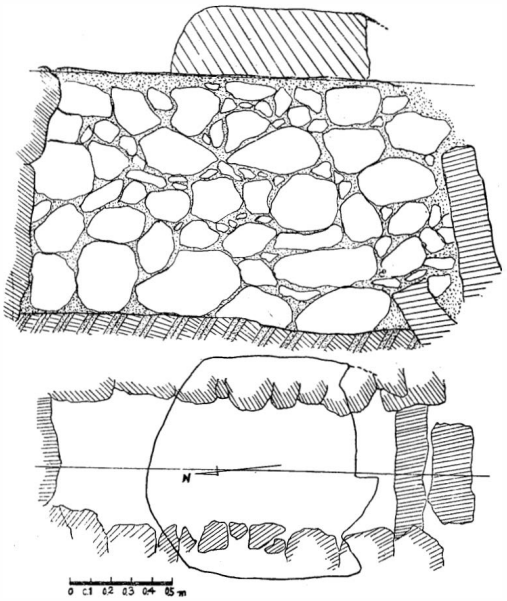
奥壁にどのような形の岩を置いてあるかを横穴式石室で当地方の例を見ると，勿来市金冠塚古墳[5]では大きな一枚岩であり，昨年調査された勿来市四沢住吉の古墳も同じく一枚岩であった。磐城史談の金沢邦男氏の報文とスケッチによれば，高久天神塚や牛転古墳は積石をしているように見えるが不正確である。

最後に78号墳について述べてみたい。積石長方石槨とふつう呼ばれる形のもので，石城の古墳においてはこのような形のものをまだ知らない。ことに興味をひくのは竪穴を地下に設けたことであり天井石が地表土にあって，深さは1.2mである。真野39号墳も箱型石室を地下に設けている。80余個の自然砂岩石を両側壁に積み重ね両奥壁はやや大きい石を立てるようにして数ケ積んである。そして粘土と小石を混じて目張を一面になし天井石の周囲にも固くそれがあったという。地表下にある遺構に伴なうものであろうが，粘土による目張は普通的なもので珍しいものでないことは熟知の通りである。しかし石城において地下にかかる石槨を設けた例を見ないので，貴重な資料となった。

以上主として古墳の内部構造を中心として述べ，その奥壁の状態についていささかの推考を試みた。

最後に横山古墳群と取り組んで4年絶ゆまぬ努力と研究を重ねつつ，その結果を4回にわたって報告文として発表した責任感と，磐城高校史学研究会のチームワークに感謝の意を表したいと思う。また終始変わらず調査に御指導御助言下さった指導者の各先生にも深い感謝を捧げる次第である。

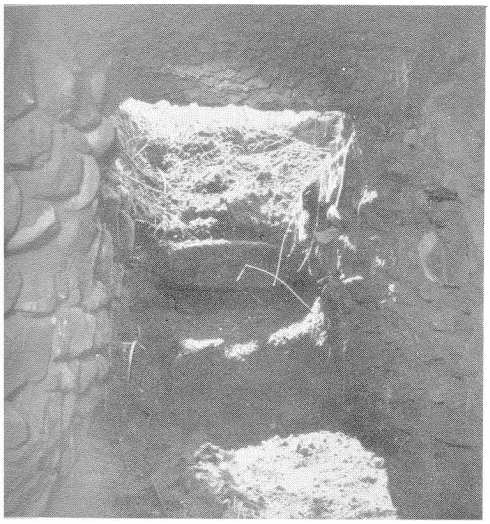
註　1．「第1次高久古墳地帯調査概略」金沢邦男岩磐史談2巻4号（昭和12年）
2．「陶棺発見の東北の一古墳」滑川広之考古学雑誌4巻3号（大正2年）
3．「真野古墳群調査概報」藤田亮策史学23巻3号（昭和23年）
4．「石城における古墳時代の石室と棺㈠」渡辺一雄　考古10号（昭和32年）
5．「金冠塚調査」成田克俊　　岩城史談　（昭和30年）



横山78号墳（磐城考古・オ7号）

勿来金冠塚古墳

勿来金冠古墳全景

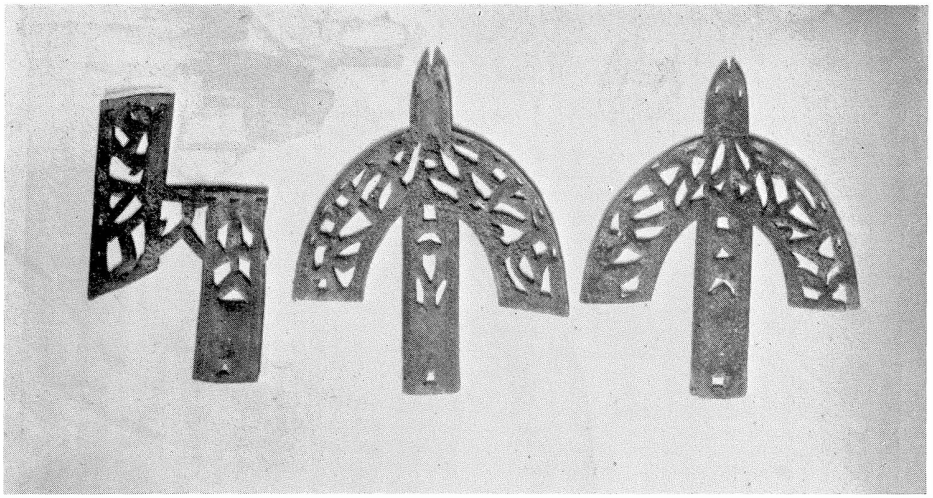


横穴式石室内部

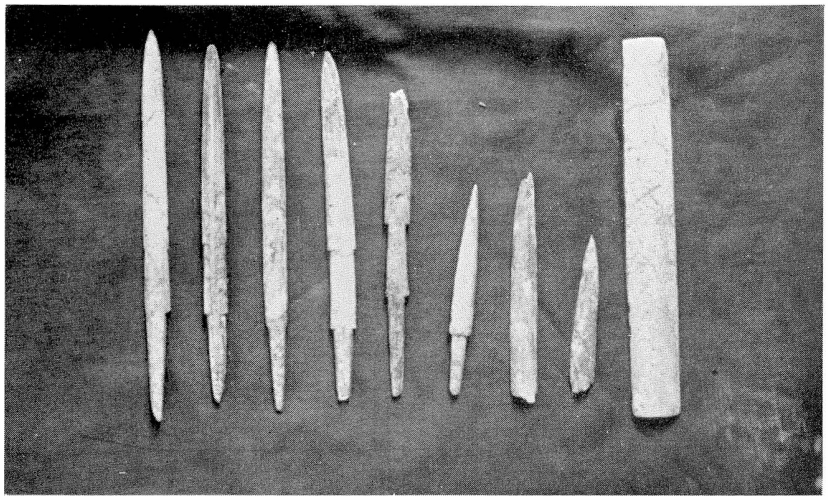
人骨出土状況

飾金具，骨鏃，金環出土状況

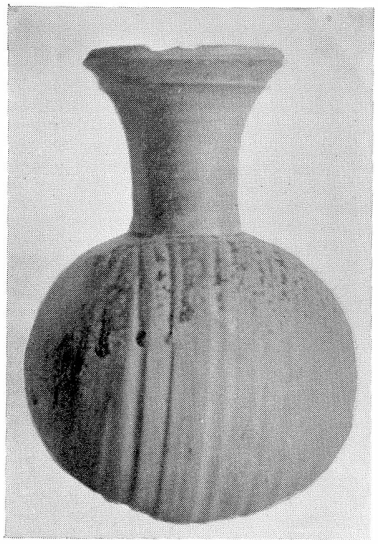
蓋付椀出土状況

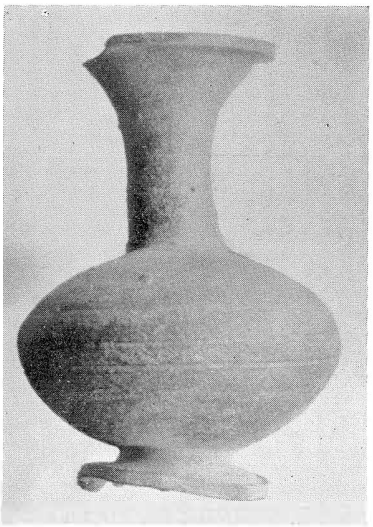


金銅製飾金具



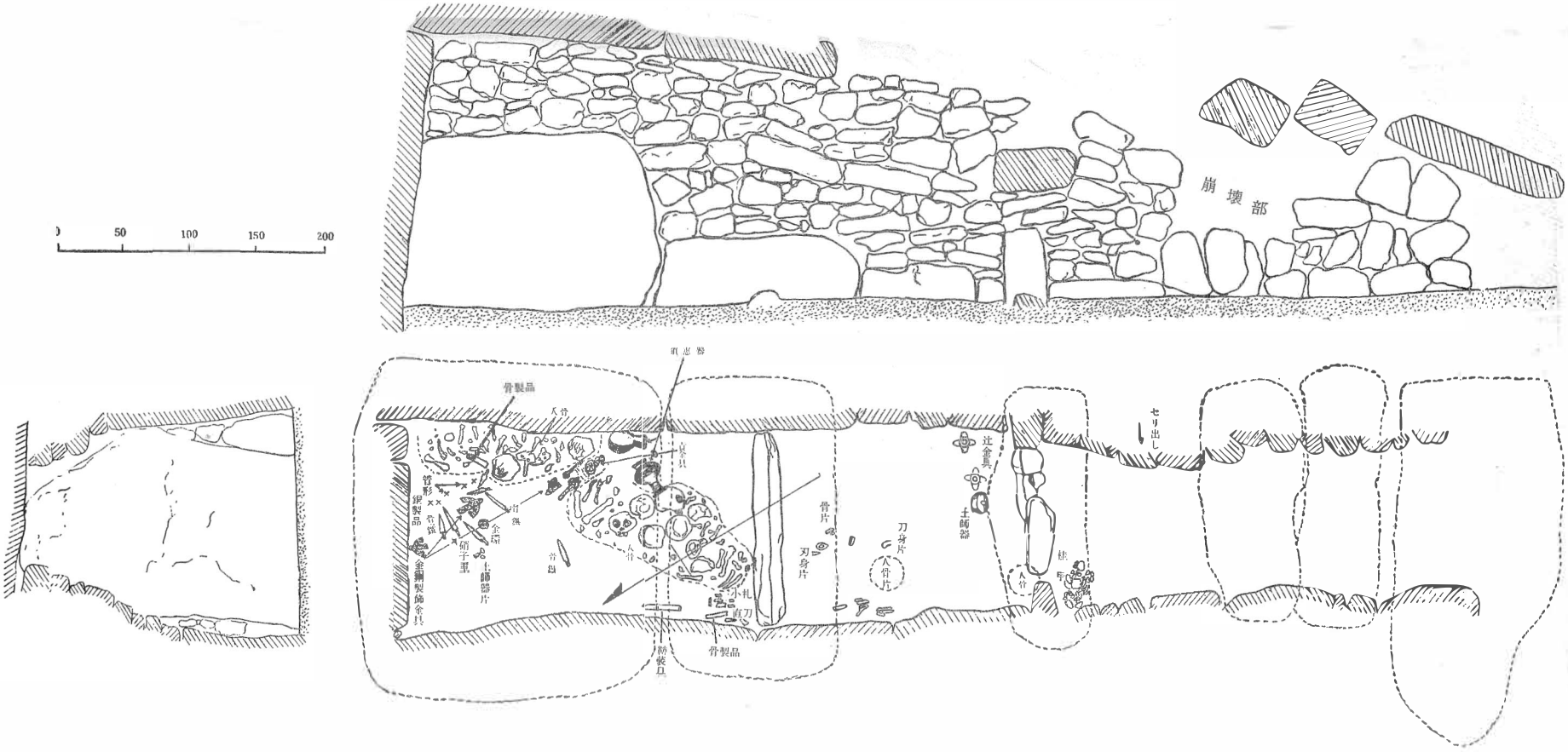
骨鏃



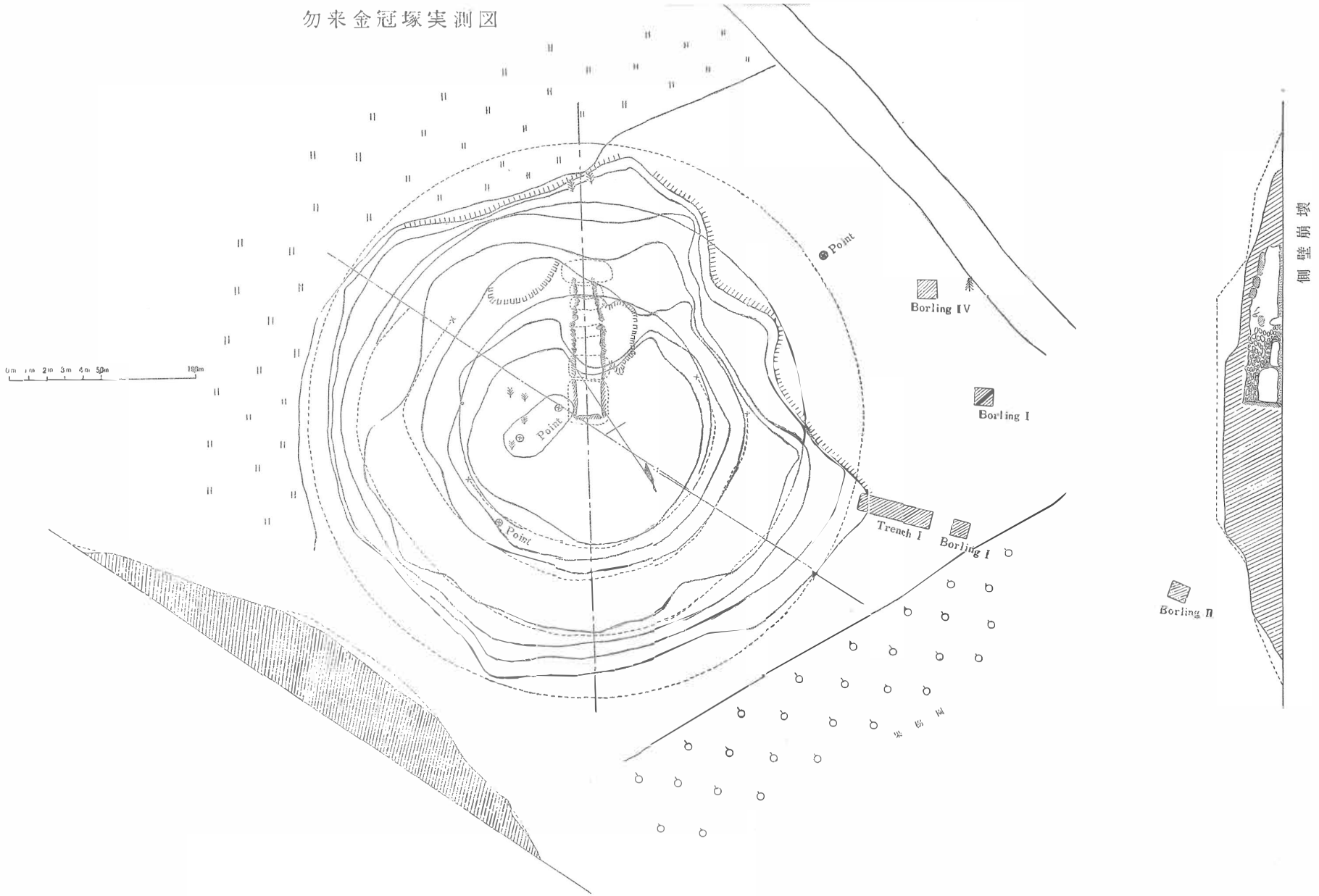


須恵器坩

勿来金冠塚古墳石室実測図



勿来金冠塚実測図


0m 1m 2m 3m 4m 5m 10m
Point
Point
Point
Borling IV
Borling I
Trench I
Borling I
Borling II
側壁崩壊

勿来市金冠塚古墳調査概報

成　田　克　俊

梅　宮　　茂

本古墳は文化財保護委員会発行の埋蔵文化財要覧㈠に福島県山ノ上古墳として所載されているものである。これは最初の報告に地番の誤があったもので，改めて後藤守一先生により金冠立挙が出土した故をもって金冠塚と命名されたものである。昭和25年11月石室実測図作製中埋蔵物があることが確認され，さらに昭和28年5月後藤守一先生を招いて再調査を行なったもので，出土品は国有品となったものの外第2次調査により発見されたものは明治大学の先生の研究室に保管されている。

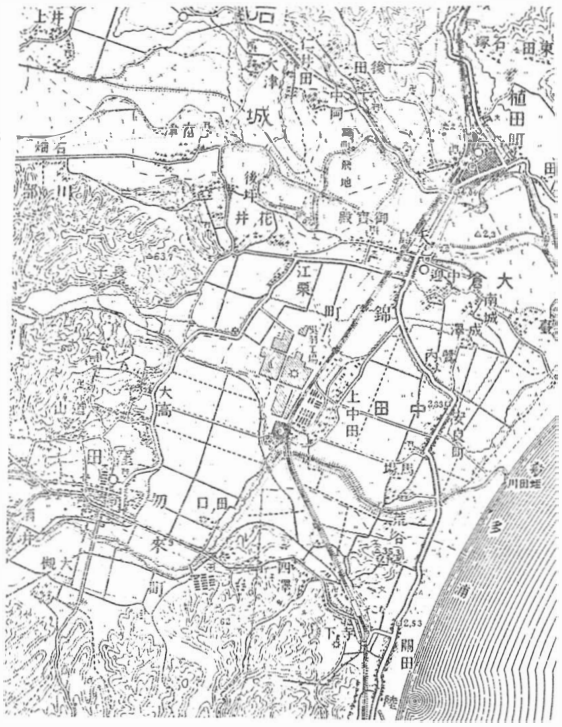
本報告書は後藤先生監修により出版される予定であったが事情があって後日出されることになるので取り敢えず概報として本書を出し，副葬品の実測図や詳細の論考について省略することとする。

本調査は福島考古学会員であり当時勿来中学校教諭であった成田克俊君が執筆し，発掘担当者として加筆の上共同報告書として刊行するものである。

福島県社会教育主事　日本考古学協会員　梅　宮　　茂

㈠ 古墳の位置

金冠塚古墳は，福島県勿来市錦町大字中田字堰下にある。常磐線植田駅より南2キロ米呉羽化学KKの社員寮に近い鉄路に添うて海抜2米の砂丘にあって，高さ3米，経30米の円墳である。封土中に松などの常緑樹が多少生えている。



この砂丘上には，植田町より勿来関で有名な勿来町に通ずる道路が南北に走っており，これを併行して走る常磐線の両側に七基の円墳が点在している。北側より大塚，飯盛塚，釈迦堂塚，糠塚，王子塚，落合塚，金冠塚があり，これらを土地の名をとり中田古墳群と呼ぶ。

錦町大字中田を中心として，錦町大字江栗，大字長子には横穴古墳があり，北に隣接する植田町大字後田に円墳群，大字仁井田には前方後円墳，大字添野に横穴，大字岩間には円墳及び横穴等がある。また錦町に蛭田川を境に南接する勿来には，大字関田に横穴群，大字白米に円墳群がある。植田町大字後田字源道平の円墳よりは丸玉，小玉，直刀などと共に21脚を有する東北唯一の陶棺が出土し，付近には形象ハニワが多く前方後円墳もある。錦町の飯盛塚，落合塚，糠塚などからは，組合せ式石棺，直刀，須恵器が出土したといわれているが，出土品，出土状況が不明であり，今回もこれらを再調査する暇がなく，金冠塚との関係を知ることができなかったのは残念であった。

(二) 調査の経過

金冠塚の存在する一帯は40数年前より開墾されているが，昭和11年クレハ化学工業株式会社がこの地に建設されたため，工場及び住宅敷地として今日に及んでおり，このため付近の土地は建造物の敷地としてますます利用され，中田古墳群もこのため封土を失ない，石構の痕跡も窺われなくなり，遠からず全古墳の姿を没することが考えられる。そこで錦町では，県教育委員会，福島県学生考古学会に学術調査を依頼し，もっとも急を要する金冠塚の実測図作製を始めた。金冠塚は周囲が畑となっており，西側は墳丘の一部が開墾されたため崖状を呈し，東側，北側は原形を保ち南側は盗掘により攪乱され，羨門の一部が開口していた。高さ1㍍50㌢及び2㍍において段をなし，封土は23度前後の傾斜を示している。周溝を確認するために周辺をピット・トレンチにより調査したが明らかでない。

昭和初年，墳丘の中央部に貯蔵穴を掘った時石室の天井石に当ったので，この天井石を掘り上げたところ，石室には砂が一ぱい入っており，天井石下60㌢㍍の深さにおいて，頭骸骨2人分，直刀1を発見したが人骨があったため，その後手をふれないでいた。後この石室は乞食の住むところとなり，戦争中は付近の人々が，防空壕として利用したため石室内がほり下げられ，天井石より1㍍20㌢の深さまで土地の人々により掘られてあった。

調査は昭和25年11月4，5日の両日梅宮が調査担当者となり，成田は奉職している錦町中学校及び磐城女子高校，湯本高校の生徒有志の協力を得て，平板測量を行ない，石室の実測にかかった。まず石室内部の砂を除去して底部を確認しようとしたところ，人骨，金属類が出土したので，改めて副葬品の発掘にかかり，所定の調査を了した。石室はさらに羨道部にのびる可能性があり，そのためには落盤を除く必要があるので一応調査を中止し，改めて再調査を計画することとした。

第2次調査は，昭和28年5月3日から1週間にわたり，明治大学教授後藤守一氏，助手大塚初重氏を迎え，梅宮，成田の外に佐藤一，長谷川辰雄を加え，錦町役場が主体となり前記学校生徒の協力を得て実施した。

(三) 調査の状況

○石　　室

金冠塚の内部構造は，第1次調査では，詳細に判明しなかったが，第2次調査の結果，前室，後室の複室よりなっている横穴式石室で後室は幅1㍍54㌢，長さ2㍍，前室は幅はややせまく1㍍44㌢，長さ2㍍5㌢，高さ1㍍70㌢，羨道は後室と幅大差なく，幅1㍍36㌢，長さ3㍍30㌢，高さ1㍍40㌢であり，石室の長さ7㍍59㌢で本県において発見された横穴式古墳では最も長い石室である。

石の質は福島大学三本杉巳代治教授の鑑定によると，班糀岩，泥岩質頁岩，凝灰質頁岩などよりなり，天井石は3枚の礫石よりなっている。

○出土状況

第1次調査は玄室のみを発掘した。天井石より1㍍35㌢において人骨片出土を見たが，1㍍45㌢において頭骸骨2，須恵器台付長頸坩1，瓶1が出土，この下に厚さ2㌢㍍の板状の砂岩が敷いてあり，この下に砂を一ぱい敷きつめこの下15㌢㍍よりさらに頭骸骨5人分をはじめ多数の人骨が出土した。この下には前と同じように，砂岩の板石が敷いてあり，砂岩の板石の下25㌢㍍において頭骸骨2人分，人骨片多数が，骨製品1，全銅製飾金具3，金環，骨鏃，金銅製大刀の残欠，刀身，馬具，挂甲の小札，土師器片，硝子製小玉，管形金銅製品，金糸片など出土した。これらの遺物の下には，前と同じように砂岩の板石が敷いてあり，遺物が3層より成っておったことは，重葬によるためであろう。

後室は，天井石より1㍍85㌢において最後の遺物層があり，この下にあった砂岩の下よりは一片の遺物の出土を見なかったところからこれが床面と考えられる。この床面は墳丘の地平面に接するレベルと同一であるから，この墳丘は地面上に石室を組み封土を盛り上げたものと想定される。

前室と後室の境は頁岩によってさえぎられているが，玄室は割石によって積んであった。

昭和28年5月3日より1週間にわたる第2次調査は前回に引き続き未調査であった羨門に沿って発掘した。羨道も前室も後室の床面に相当する深さにおいて遺物層に達し，前室より鉄製の倒卵形鍔1，直刀片，鉄鏃8本，金銅製責金具1，辻金具2，琥珀玉1，黒色蓋付椀1，人骨2人分挂甲及び兜が出土した。これらの中，挂甲は羨道から出土したが，羨道から遺物が出土する例は稀である。

㈣ 遺　　物

本古墳より出土した遺物は総て文化財保護法により，埋蔵文化財に指定され，国庫に帰属し，第2次調査の出土品は明大の後藤守一先生のもとに保管中で，この詳細については，後日改めて報告されることになるので，今回は第1次調査のものについて報告することとする。因に国庫に所属した遺物は次のとおり[1]

遺　物　品　目

(1)	金銅製飾金具	3個	(8)	挂甲残片	16個
(2)	金銅製鞘装具破片	1個	(9)	ガラス小玉	1個
(3)	金　　環	1個	(10)	骨製品	1個
(4)	管形銅製品	5個	(11)	骨　　鏃	8個
(5)	金銅製責金具	2個	(12)	須恵器坩	2個
(6)	金銅製線条片	1括	(13)	馬具断片	1括
(7)	刀身残片	1個			

詳細については後日報告することとし，代表的なもの数点について記そう。

（天冠をつけた人物埴輪）

金銅製飾金具　3個は天冠の立挙り金具とみられる。飛燕形のもの2個と，他は違い棚状を呈した角形1個で，各々三角形の透彫と唐草模様が毛彫されており飛燕形は長さ11.6～11.9㌢，最大幅10㌢，角形は長さ10.3㌢，幅6.1㌢共に厚さは6㍉の金銅製のものであり，これらが散在して出土したところから，以前攪乱された形跡が考えられるが，金線条片や管形銅製品（長さ0.5～0.7㌢）及び硝子玉が出土したことから頂上の小穴に下げてあった瓔珞と思われる。

金銅製双魚佩の出土で有名な滋賀県高島郡高島町鴨稲荷山古墳よりは，幅の広い帯状鉢巻の上部に3個の花形の立挙を付け，裏面は布をはり，随所に硝子玉や絹糸の飾りをつけ，所どころに魚形と心葉形の瓔珞を下げたものが出土しており，また群馬県佐波郡上陽村大字小王二子山古墳出土の金銅製山形立挙に心葉形の瓔珞をつけた冠が出土した例や，茨城郡駒形出土の冠のある埴輪，韓国の金冠塚出土の金冠から考えて，この古墳出土の金冠も同一系統のものと見られる。

本県においては，重要文化財指定の磐城高等学校保管の埴輪男子胡坐像は（写真参照），平市高久の神谷作古墳出土であるが，鈴をつけた三角形の飾りをつけた，はなやかな天冠をかぶっており，相馬市八幡の古墳からは，静岡賤機山古墳出土の金銅製冠帽金具の残欠と同じものが発見された例がある。[2]

他に金銅製品には，鞘装具破片と責金具がある。鞘金具は現長18㌢の刀身断片に，長さ6.2㌢幅4.3㌢の金装を施しているが柄頭その他はない金環は1個のみで，径2.9㌢ある。

骨製品　本出土品中特異なものとして，2種の骨製品がある。一つは骨鏃8個で長さ15～3㌢で，県下田村郡田村町大善寺古墳から鉄鏃と共に出土した骨鏃と同形である。[3]　他の骨製品は，第1次に1

個，続いて第2次調査においても前室から発見された。前者は，片面を平坦に，他面は蒲鉾状にふくらみのあるもので，長さ14.4㌢，幅1.9㌢，厚さ5㍉後者はやや小さく長さ8㌢，幅1.5㌢，厚さ3㍉である。前者には一端に「十」と「三」の形の陰刻がある。用途も明かでないので，単に骨製品とする。

挂甲残片は第2次調査においてさらに多数発見されたが他に兜が出土しているが，小札の大きさは長さ6㌢，幅2㌢5㍉で兜は桃実形と思われるが，復原されていないので詳細は略する。

須恵器坩．1個は長頸坩で胴部に自然釉のある普通の形で，高さ25.2㌢口径10.5㌢，他は高台付長頸壺，頸部に浅い二条の線，胴部に二条の線と波形の文が彫られている。高さ高台共23.2㌢。

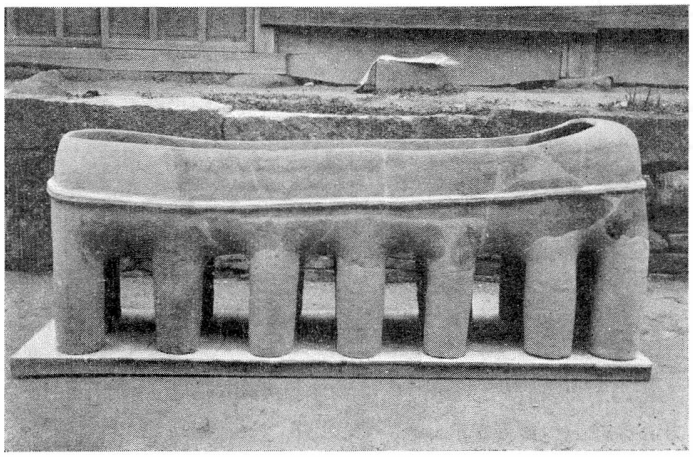
土器はこの他に土師器破片と蓋付椀がある。黒い漆を塗布したように内外共に黒く，表面は光沢があり磨かれたように美しい。時代は下るが，県下では郡山市円寿寺蔵の同市七ツ池出土の二彩釉水瓶に伴出した香炉形瓦器がある。(4) この他に馬具断片，辻金具等がある。

最後に人骨の問題であるが，1個の石室から13人分の人骨が出土している。これは栃木県足利市公園の横穴式石室から12人分の成人と2人分の子供の人骨が出土した例に次ぐもので，県下では西白河郡中島村二子塚の横穴墳が，古い人骨を奥壁に片つけて，次々と葬った例がある。家族墓で，重葬した例としても貴重である。

ただし，盗掘の際2人分の人骨がとり捨てられ，その後も攪乱されているので，どの人骨にどの副葬品が伴なったかは明かでない。

㈤ む す び

金冠塚古墳の示す特徴をあげてみると，㈠玄室が複室であること。㈡玄室と羨道において幅の差が余りないこと。㈢一つの石室より13人分の人骨が出土したこと。㈣金銅製天冠立挙り金具が出土したこと㈤骨鏃等の骨製品が出土したこと㈥羨道より遺物が出土したこと。㈦遺物層が三層からなっていること。などがあげられよう。



陶棺　勿来後田古墳出土（松本友之複原）

本古墳は，石室の構造からみると古墳最盛期の横穴式石室であり羨道の長い点，本県古墳の形式からみると，比較的古いものようであるが，出土品からみると，馬具があり，土器の形式からみても，古墳時代後期に属するものと見て大きい誤りはないようである。

本県の古墳文化を通観すると，真野古墳49号円墳や，田村町正直の木炭槨を有する円墳等古い時期に属するものは，畿内の古墳時代中期の前葉頃に当り，この頃から，古墳文化が発達してきたものであろう。

末期古墳としては，蕨手刀と共に骨鏡を出した信夫郡信夫村大字平石のアカシバ古墳や和銅開宝銭を出した岩手，山形等の古墳と比較すると，金冠塚は，東北地方の古墳文化の最盛期のものと見てよかろう。

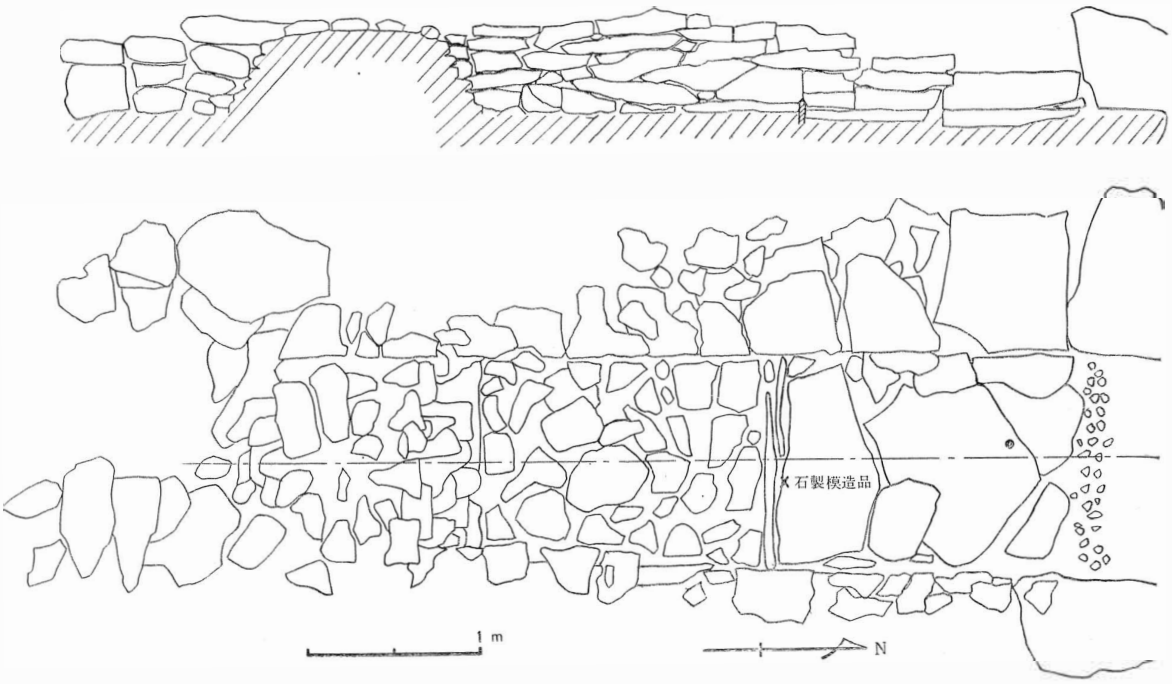
この時代について，従来の歴史によれば，東北地方は蝦夷の住む未開で野蛮な土地といわれていたがこの金冠塚の出土品をはじめ磐城高校の天冠を有する埴輪，陶棺を出土した後田古墳（写真参照），東北各地の古墳の出土品から考えれば，中央より遅れてはいるが，高度の中央文化が相当古い時代に北上して伝播し，一つの文化段階を形し成しているので，大和地方と甚だしく相違した文化の所有者の住んだ地方と，さげずんで考えていた史観を改めて是正する必要があろう。この意味において本古墳のもつ文化史的意義は高く評価してよい。

（附記）本古墳は昭和30年２月４日附をもって，福島県史跡に指定された。

注 (1) 文化財保護委員会編　埋蔵文化財要覧１，
(2) 人類学会雑誌第16巻第181号大野延太郎「磐城線10日の旅」
後藤守一，斎藤忠共編　静岡賤機山古墳
(3) 梅宮茂編「福島県発見の埋蔵文化財図録」
(4) 江坂輝弥「郡山市七ツ池の三釉出土遺跡について」

田村郡御代田古墳調査

佐　藤　雄　壽



昭和30年，福島考古学会では梅宮茂の責任において下記の調査を行なった。

所 在 地　田村郡田村町御代田字中林188

調査月日　昭和30年12月17，18日

調 査 者　佐藤雄寿・目黒吉明・成田克俊・石井寛治・守山中学校長大江栄，及び郡山商業学校生徒

概　況

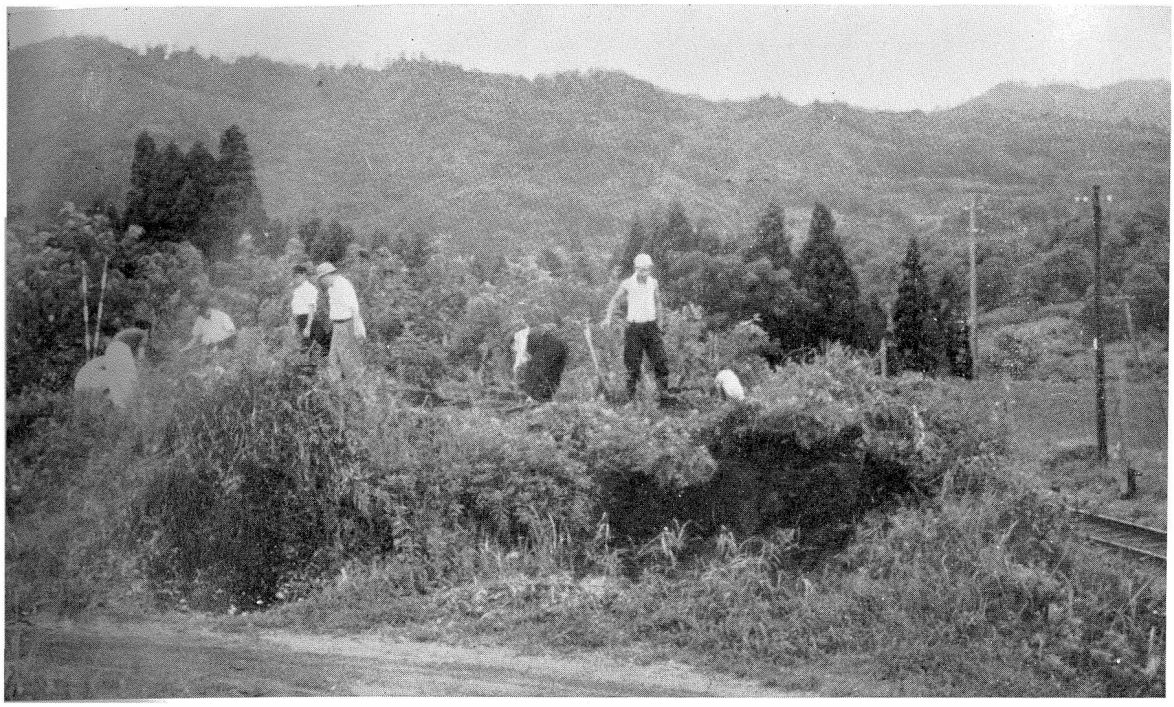
郡山市の東南阿武隈川東岸の山地で，近くに正直古墳群，御代田祭祀遺跡等がある。附近の青年が石室露出を発見したが，すでに古い頃に盗掘された形跡があった。

石室は地下に構築され，実測図のとおりほぼ南北の方向に割石を積んだ竪穴式石室で，底部の長さ約3.4㍍，幅奥壁に近く1.25㍍，深さ0.5～0.7㍍あったろう。

中央部に二枚の板石で前室，後室に二分され，奥壁に近い石室には大きい石，前室には小石をしきつめられ，前方（南）に羨道とおぼしきものがあり，これを含めると全長約6㍍である。天井石は破壊されて不明。

割石に近く円形の石製模造品（鏡か）1箇と，奥壁近くから銀被せの耳飾りが1箇，他に土師器破片があった。竪穴式石室であるが，横穴式石室の影響を受けて羨道を有している点から，古墳時代後期に属するものであろう。

会津上野尻遺跡

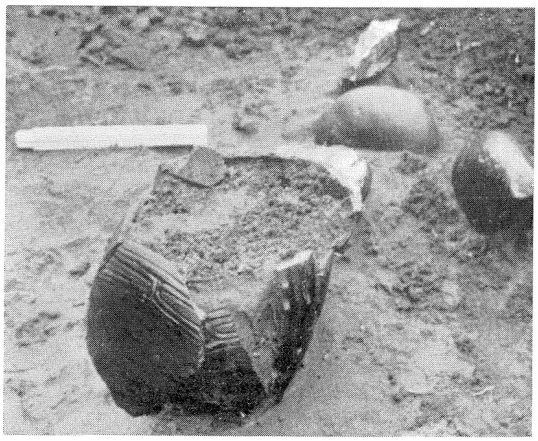


上野尻遺跡全景（鉄道の右端は阿賀川である）

出土土器

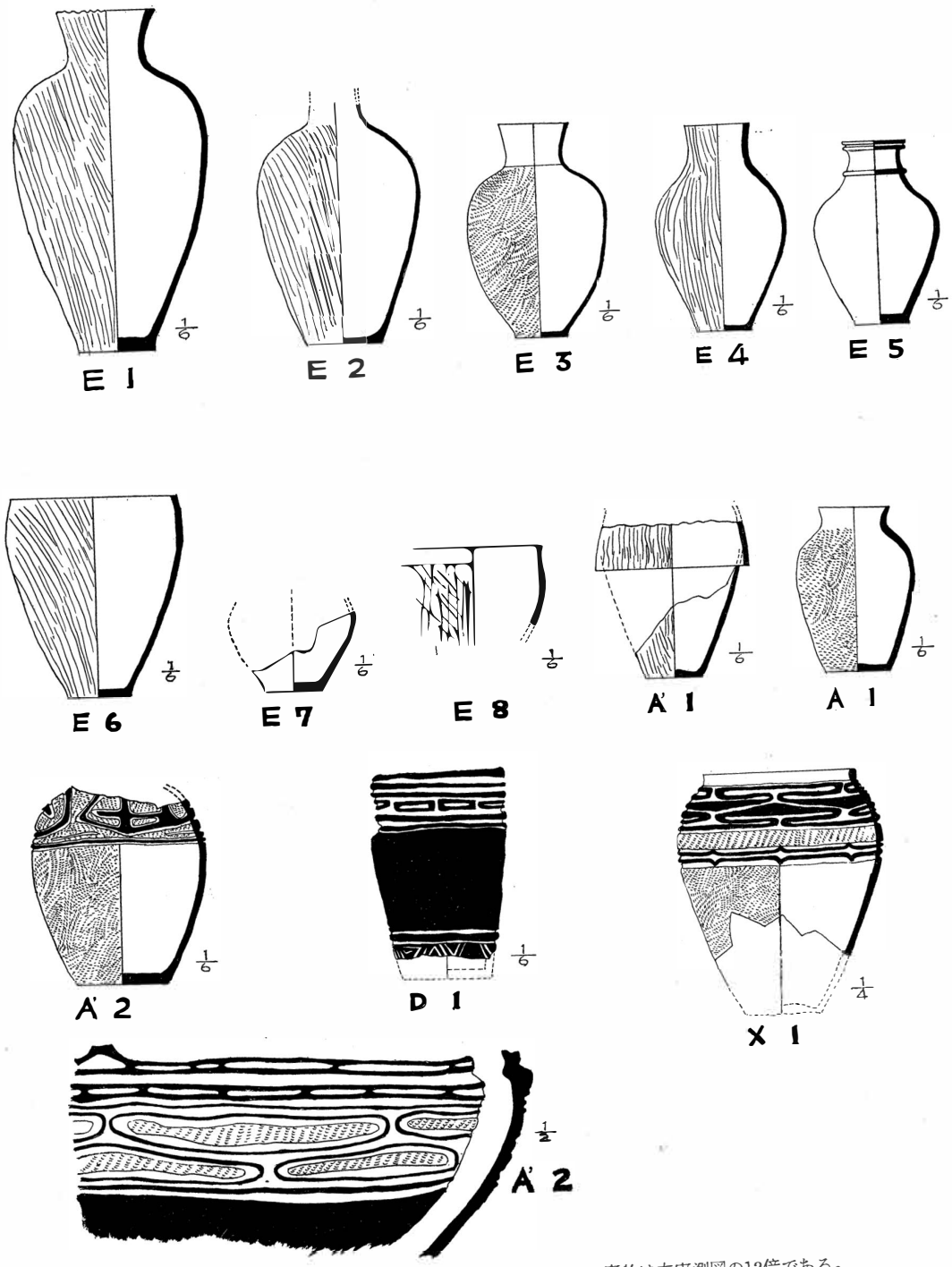
横倒しに出土

この上に逆に伏せた土器があった



土器片で囲んだもの

上野尻遺跡出土土器実測図



（注）　縮尺1/6となっているが，印刷の都合で，さらに1/2としたので，実物は本実測図の12倍である。

会津上野尻遺跡調査

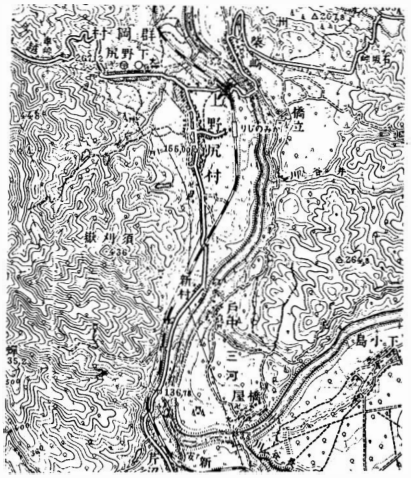
—福島県耶麻郡西会津町上野尻弥生式遺跡調査報告書—

鈴　木　　啓
梅　宮　　茂

◇位　　置

福島県耶麻郡西会津町群岡字上野尻東林崎3093の1。

地理調査所発行5万分の1の地形図「野沢」の上野尻駅（かみのじり）の北400㍍に阿賀川を渡って柴崎に達する橋梁がある。ここには上野尻発電所が建設されており，磐越西線と道路との交叉点が本遺跡である。この地域は，会津盆地と越後平野をつなぐ地点に位し，越後山脈を東西に貫いて流れる阿賀川の沿岸にある。一帯は丘陵・山岳地帯であり，磐越西線と国道が併行して阿賀川に添い，これらの両側にわづかに耕地が開けている。両側に高位・中位・下位の3段の河岸段丘がみられ，遺跡は中位河岸段丘に当り海抜3百㍍，阿賀川水面から約20㍍上である。



◇遺跡の状態

上野尻遺跡と称する地帯は相当広く，半径百㍍におよぶ円形の範囲内に，西林崎・沖野原・五職神等は縄文中期から後期にかけての遺跡で，土器，土偶，石器が数多く出土している。

このうち発掘地点は阿賀川岸に添う鉄道線路と道路とが鋭角に交叉する内角の部分に当り，一段と高く，両側から削り取られた形となっている桑畑の一部で，土壌は黒色の砂質地である。

この地点は，前記の諸遺跡と異なり，縄文晩期，弥生式の土器片が散布しており，現在国立博物館に保管されている。中空につくられた特殊な土偶(福島県史跡名勝天然記念物報告書第3集「福島県発見石器時代土偶図版」所載（写真参照）は本地点より出土したものといわれ注目されていたところである。

昭和31年この地点に上野尻発電所が建設されることとなり，本遺跡の一部に附属建物が建てられて多量の出土品が破壊された。たまたま学童の手により道路際の削りとられた断面から数個の土器が掘り出されたので，この調査を実施したものである。

現在本遺跡は調査終了後包含土層と共に阿賀川底に捨て去られて，地形は変化している。

◆発掘の経過

昭和31年6月埋蔵文化財発掘届を左記により申請した。

発掘調査の主体者　福島県立耶麻高等学校（野沢校舎地歴クラブ。顧問　鈴木啓）
発掘担当者　　福島県教育委員会社会教育主事　梅　宮　　茂
土地所有者　　青津フミ

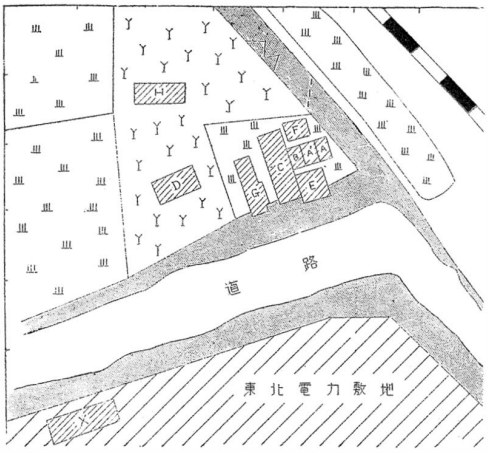
発掘は7月20日予察を行ない，22日一帯の平板測量，7月23日より発掘に着手し，25日に終了した。

この調査の主力をなしたものは，前記耶麻高校野沢分校の地歴クラブの生徒諸君であるが，地元の西会津町教育委員会教育長青津勇，群岡中学校，東北電力上野尻調査所（若林所長）の諸氏，ならびに土

地所有者青津フミ氏の多大の協力があって短時日の調査であったが所期の目的を達することができたことを感謝したい。

◇発　掘　状　況

発掘地点は，約1畝歩の区域であるが，出土状況によりA・A′・B・C・D・E・F・G・H・X，の10に細分される。



第1日　平板測量後午後1時よりA地点の発掘を開始，地表より45㌢のところより土器2個を発掘。

第2日　A′・B・C地点の調査を始む。A′地点より昨日のA地点と同一レベルより甕棺1個と，土器片をもって周囲をかこった甕棺のごときもの1個を取り上ぐ。前者は耕作の際上部半分を削り取られたため，垂直に立てて置いた合せ口甕棺の，蓋は口縁部のみを残し，身の部分は口縁部を欠いている。後者は土器片数個をもって周囲をかこったものであり，底の部分にも蓋の部分にも土器片は見られなかった発掘地が狭少で，東面と南面がそれぞれ鉄道と道路であるため，掘り上げた土を出すことが不可能であったから，止むを得ずA・A′・Bを調査し，これを埋めてF・Cを掘り，これを埋めてGを掘るという方法をとった。各地点より土器片多数を得て第2日を終了。

第3日　D・G・H地点の発掘，同時にX地点の調査を行なう。G地点より土版，D地点より土偶を発見，午後は出土品の整理を行ない全日程を終了。

次にF・X地点は多量の出土品を見たが，特殊の状況にあったのでこれについてさらにくわしく述べることとする。

E地点は調査に着手する以前，群岡中学校生徒数名が砂を採取するため道路側から掘り進めたころ，数個の土器が露出したため，側面より横穴式に発掘を行ない，大・小6個の完型，略完型，復元可能土器を得たのである。不用意な取り扱いをしたため，包含状態など重要な点が不詳であるのは残念であった。

X地点は，東北電力上野尻調査所が社屋を建てるため整地を行ない，約30平方㍍にわたって1㍍程ブルトーザーで地盤を掘り下げたため，削り取られて押し上げられた盛土の表面より採集し，復元を加えたものである。

本遺跡はAピットの2個，A′ピットの2個の甕棺，およびそれに類似のもの，Eピットの6個の土器の埋蔵状態，土器の間隔，レベルから考え，またEピット出土の中多量の煤の付着した煮沸用のものが認められる点など，Eピット中心に考えた場合住居跡に附属する貯蔵庫と考えられる。大洞A・同A′型式の土器も伴出しているが，何れも小片であり石器が少ないので，本遺跡は弥生式初期のものとしておく。

◇遺　　物

土器実測図のE1は，Eピットより出土した一群のもので，黄褐色を呈しているが，下半は黒褐色であり口縁に刻み目がある。文様は条痕文であり口頸部は条痕がほとんど縦に走り，肩部は斜行，それ以下はほぼ縦に走っている。

胎土は良好で焼きも固い。丁度中間あたりから水平に2つに割れている。これは輪積みの手法によ

るため偶然割れたものと考えられるが，故意に２分して甕棺に利用したものと考えられないこともない現にA′からは甕棺が出土しており，この土器も垂直に置いてあったといわれているから，あるいは甕棺であったかも知れない。

Ｅ２，暗褐色を呈し薄手である。胴部の割れ目に接着材を塗扶して修理した痕が明瞭である。

中空の土偶　現国立博物館蔵

Ｅ３，全体が黒味がかかっているが下半はやや明るい色調である胴部に煤が膠着している。材質は極めて不良で砂を多量に含んでいる。焼きも悪く脆い，全体に細かい縄文が施されている。

Ｅ４，全体が暗褐色を呈しており，胴部に煤が附着している。壺形であるがＥ１，Ｅ２，Ｅ３と異なり胴部の張った形である。材質は不良で焼きも悪く不整形である。

Ｅ５，赤褐色で口縁部に２本の帯を有し無文である。材質は砂を含まず良好である。

Ｅ６，上半黒褐色，下半は明るい色調で黄褐色を呈している。上半の片面に多量に厚く煤が膠着している。煮沸に使用したことが明瞭である。材質，焼き共にやや良好である。鉢型で斜行条痕文が付されている。

Ｅ７，底部の破片であるため壺か鉢か不明であるが，恐らくＥ４に近く，背がそれよりやや低い壺型と思われる。暗褐色で無文。

Ｅ８，口縁部のみの破片，赤褐色で口頸部以下に条痕文がある。鉢型で口縁部が外反している。

A′１，これはA′ピッから出土した甕棺で，甕型の土器２個の口を合せたものである。耕作の際半分が削除されているが，合せ口の甕棺と認められる。蓋の口縁の方が大であり，身の土器の上半，蓋の土器の口縁部に多量の煤が附着している，共に条痕文を有し，材質焼きは蓋の方が良好である。

Ａ１，口縁の外反する壺型土器である。口頸部以下に斜行縄文が施されている。大きさの割合に厚手で光沢のある黒褐色を呈している。材質，焼き共に良好な精製土器でてる。

A′２　ＡピットよりＡ１と並んで出土したものである。頸部に太い沈線にＸ字型の磨消を行ったものである。口縁部を欠いているが，Ａ１同様の外反する口縁を有するものと考えられる。全体にＡ１同様の斜行縄文がある。材質，焼き共にＡ１同様の精製土器である。これと同様の縄文にＸ字型の磨消を行ったものが，Ｘ地点より出土している。この手法は現在国立博物館にある。前記中空土偶（写真参照）にも見られる点特に注意を要するもので本遺跡出土品中注目すべきものである。

Ｘ１．Ｘ地点の損乱された地点から採集されたもので甕型で口縁部に沈線による工字文が施されている。胴部に縄文帯を挾んで三本の沈線があり，腰部以下は斜行の縄文である。口縁には施文がなくやや外反している。黒褐色を呈し砂を含み，材質，焼き共にやや不良，底部を欠いている。

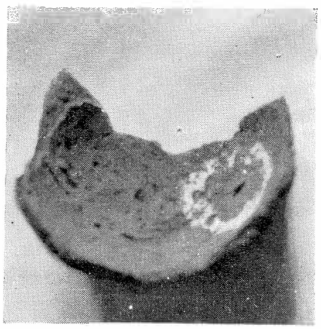
A′２ A′ピットからの出土で，数個の破片に分れ，何かを囲った様な形になっていたものを継ぎ合せたものである。口縁には四っの突起があり，口縁に２本の隆帯が沈線を挾んでつけられている。二本の隆帯の上表には線刻が施されている。隆帯の下は縄文に磨消が施され沈線による工字文がみられる。材質極めて良く表裏共に滑沢を帯びた精製土器である。

Ｄ１．深鉢型で口縁部に二本づつの沈線による工字文的刻文がみられる。底部にも二本の沈線があり底を欠く。表裏共に黒色を呈し滑沢を有する精製土器である。

◇考　　察

縄文晩期土器について

大洞A・A′式で占めらなている。大洞A式は数は少ないがそれに比定出来るものがある。大洞A式と呼ぶよりは，むしろ千網式A２類土器とする方が妥当である。口頸部は浮線，隆線工字文と深い帯状の平行沈線文によって装飾され，体部は斜行縄文か無文である。器形は壺，皿，椀等が認められる。口縁は平か小波状で底部は丸底である地文は縄文，撚糸文を有するか，無文で焼成良好の精製土器である。これの粗製土器と思われる。千網式C１類土器比定のものがある。口縁に附帯のある鉢型土器が大多数を占めている。口縁は内向するのが一般であるが，外反するものもある。器全面に亘って条痕が附され，多くは右に走る斜行条痕であるが綾杉状のものも見られる。尚口縁部の付帯にも条痕を有する。


籾の圧痕のある土器底部

大洞A′式土器は多量に見られ，破片から推察すれば甕型，鉢型，皿型等を認めることができる。これは新潟県の鳥屋，あるいは六ノ瀬遺跡より出土する工字文のある磨消文土器に比定することができる。さらに粗製土器として網目文土器が多量に出土しているが，これらは鳥屋遺跡に見られる粗製土器に比定できる。

また大洞A′の工字文の下に条痕文を施したものも出土しているが，この事はこの遺跡に於いて大洞A′式が縄文の最終様式であることを示している点重要遺品である。なお大洞A式，千網式A２類土器併行のものは新潟県の乙茂飯田遺跡出土のものの中に，関連あるものと認めることができる。

弥生式土器について

Eピット出土の一連の完型土器は，北関東の女方遺跡併行の弥生初期のものと考えられる。県内にこの系統を求めれば，相馬市成田の藤堂塚跡出土の数個の弥生式土器があげられる。この遺跡も弥生初期と縄文晩期の混合遺跡である点も興味深い。これらの土器はAピットの二個の土器と考え合わせると，出土の状態からいって全く時間的に同一と見なければならない。AピットのA2土器に見られる磨消縄文は，X地点出土のものにも同様のものがあり，前記国立博物館保管の中空土偶にも見られる。これは北関東の野沢式にもみられるX字型の磨消と同一の系統と考えられ，会津においては若松市の南御山のI式をあげることができる。なお出土土器の破片底部に籾の圧痕のある一片が検出された。これは本遺跡が稲作を行なった証左で，特筆すべきものの一つである。（写真参照）

◇む　す　び

以上考察してきたように上野尻遺跡は，縄文晩期の大洞A式，同A′式関東の千網式の土器が，弥生初期の土器と共伴して出土ししているので，縄文から弥生への移行の時期に該当するものである。大洞A′同A，千網式等の精製土器が上野尻のA２に移行し，粗製土器がE１，E２，E３等へ移行したものと考えられ，時間的には縄文晩期の末端と，弥生初期が共存し，しかも，稲作を中心とした農耕が行なわれていたことが明瞭である。

縄文晩期の精製，粗製土器の中には，阿賀川下流の新潟県鳥屋，同六ノ瀬遺跡と関連あるものも認められる。Eピット出土の土器に代表される北関東女方式土器併行のものに見られる条痕文は，大洞A′式の口縁部以下の条痕文の系譜を引くものと思われ，上野尻のA２に見られる磨消文は，南御山の古式（I式）のものと関連があると考えることができるから，大洞A′から弥生への移行，並びに越後平野と会津平野をつなぐ阿賀川の果した役割等も理解出来るのではなかろうか。以上は飛躍した推定があるかも知れないが縄文から弥生への移行の問題をときほぐす重要な鍵であろう。上野尻遺跡の時間的位置，越後と会津の古代文化の関係，北関東と南奥州との関係等の問題につき一矢を投ずるものとして，この調査報告のもつ意義は大きい。敢て諸先輩の御指導を仰ぎ擱筆するものである。

なお，群岡小学校所蔵の児童採集品中に南御山II式に相当する細い沈線をほどこされた土器片があるので，この附近に，本遺跡につぐ南御山II式土器を出土する遺跡が存在していることを附記し，これが明になった折，再び本遺跡の詳細な報告書を出すことを約束しておきたい。

昭和35年3月発行

福島県文化財調査報告書第8集

発行者　福島県教育委員会事務局

印刷者　小浜印刷株式会社

電話 3970・3971